

# 粟 生 遺 跡

— 県道有田・高野線改良工事に伴う縄文時代遺跡発掘調査概報 —

1988. 3

財団法人 和歌山県文化財センター

# 栗 生 遺 跡

— 県道有田・高野線改良工事に伴う縄文時代遺跡発掘調査概報 —

1988.3

財団法人 和歌山県文化財センター

## 序 文

和歌山県清水町は「二川歌舞伎」・粟生薬師堂の「堂徒式」・杉野原の「御田舞」など民俗行事が数多く伝承されていることで知られており、また、町内を貫流する有田川の流域は高野七口の一つとして古来より人々の往来がさかんな地であります。この清水町に所在する粟生遺跡で県道有田・高野線道路改良工事が行われることになり、工事に先立ち粟生遺跡の発掘調査を実施いたしました。

粟生遺跡は昭和28年の水害の際、縄文土器や石鏃などが発見され、遺跡として周知されるにいたったものであります。有田川流域には縄文時代の遺跡が数多く所在しておりますが、その多くは当遺跡と同じく水害時に偶然発見されたものであり、これまで本格的な発掘調査が行なわれたことはなく、その内容については不明な点多々あるのが現状です。

今回の調査では、縄文時代の遺構や遺物が数多く発見され、また、これまで知られていなかった鎌倉時代以降の貴重な資料も得ることができました。

ここに調査の成果をまとめ刊行する次第です。本書が縄文時代の研究や郷土の歴史を知る上でその一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり種々御協力をいただいた関係各位、ならびに地元住民の皆様には深く感謝の意を表します。

昭和63年 3月

財団法人和歌山県文化財センター  
理 事 長 仮 谷 志 良

## 例 言

1. 本書は県道有田・高野線改良工事に伴う粟生遺跡埋蔵文化財第3次発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は和歌山県の委託を受け、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
3. 調査は和歌山県教育委員会の指導を受け、調査委員羯磨正信・巽 三郎・都出比呂志・藤澤一夫（和歌山県文化財保護審議会委員）各氏の指導・助言を得た。
4. 調査の組織は以下の通りである。

和歌山県教育委員会		財団法人和歌山県文化財センター	
文化財課長	梅村善行	事務局長	梅村善行
文化財課主幹	福田資弘	次長	菅原正明
文化技術班々長	高橋 彬	埋蔵文化財課長	辻林 浩
〃 専門員	吉田宣夫	埋蔵文化財課主査	山本高照（担当者）
〃 〃	藤井保夫	〃 技師	井石好裕（ 〃 ）
		管理課長	松田正昭

5. 調査にあたっては、和歌山県湯浅土木事務所、清水町役場、同教育委員会より御配慮を受けた。
6. 本概報は、井石が編集・執筆した。縄文土器の整理にあたっては、奈良大学泉拓良氏の御指導を得た。記して感謝の意を表したい。
7. 本概報には、和歌山県教育委員会および社団法人和歌山県文化財研究会が実施した、第1次・第2次調査（1985・86年度）の成果についても併せて収録した。
8. 本書で使用した遺構の記号は掘立柱建物—S B、溝—S D、土壇—S K、土壇墓—S X、ピット—Pである。
9. 本文・実側図・写真図版の遺物番号は全てに共通する。ただし、200番台の遺物は写真図版のみである。遺物の写真図版は特にことわらない限り、石器約 $\frac{2}{3}$ ・縄文土器約 $\frac{1}{2}$ ・縄文土器底部と中世の遺物は約 $\frac{1}{3}$ に統一した。

# 目 次

I. 位置と環境	1
II. 調査の経過と方法	1
1. 第1・2次調査	1
2. 第3次調査(本年度)	2
3. 層        序	2
III. 遺        構	7
1. A～C区の遺構	7
2. D区の遺構	14
3. E～G区の遺構	14
IV. 遺        物	18
1. 石        器	18
2. 縄文土器	21
3. 中世の遺物	22
V. ま        と        め	24

# 挿 図 目 次

第1図 粟生遺跡とその周辺	3～4	第13図 石鏃計測部位凡例	18
第2図 調査地区と各地区基本層序	5～6	第14図 錢貨拓影	23
第3図 S D01土層図	7	第15図 石器実測図1	26
第4図 S K12・16・27・30実測図	8	第16図 石器実測図2	27
第5図 A～C区遺構全体図	9～10	第17図 石器実測図3	28
第6図 D～G区遺構全体図	11～12	第18図 縄文土器実測図1	29
第7図 集石1・2実測図	13	第19図 縄文土器実測図2	30
第8図 S X01実測図	14	第20図 縄文土器実測図3	31
第9図 S K65・58実測図	15	第21図 縄文土器実測図4	32
第10図 S K75実測図	15	第22図 縄文土器実測図5	32
第11図 S B01・02・03実測図	16	第23図 中世遺物実測図1	33
第12図 S B04・05実測図	17	第24図 中世遺物実測図2	34

## 図 版 目 次

- |      |                     |       |                |
|------|---------------------|-------|----------------|
| PL.1 | 1) 遺跡遠景 (北から)       | PL.9  | 1) SK58 (北から)  |
|      | 2) 遺跡全景 (南から)       |       | 2) SB01 (南西から) |
| PL.2 | 1) A～C区全景 (北から)     | PL.10 | 1) SB04 (南西から) |
|      | 2) A・B区全景 (南から)     |       | 2) SB05 (南西から) |
| PL.3 | 1) C区全景 (北から)       | PL.11 | 1) 石鏃Ⅰ類        |
|      | 2) SK12・16・30 (南から) |       | 2) 石鏃Ⅱ～Ⅳ類・未製品  |
| PL.4 | 1) SD01 (北から)       | PL.12 | 1) 石錐、スクレイパー他  |
|      | 2) 同 土層             |       | 2) 楔形石器        |
| PL.5 | 1) 集石1 (北から)        |       | 3) 石斧、石錘       |
|      | 2) D区全景 (東から)       | PL.13 | 縄文土器1          |
| PL.6 | 1) E～G区全景 (北から)     | PL.14 | 縄文土器2          |
|      | 2) 同 (南から)          | PL.15 | 縄文土器3          |
| PL.7 | 1) E～F区北半検出遺構 (南から) | PL.16 | 中世の遺物1         |
|      | 2) 同 南半検出遺構 (北から)   | PL.17 | 中世の遺物2         |
| PL.8 | 1) SX01 (西から、第2次調査) |       |                |
|      | 2) SK65 (西から)       |       |                |

## 表 目 次

表1	周辺遺跡一覧表	3
表2	石鏃の長さとの比率	19
表3	石鏃の重量分布	19
表4	石鏃一覧表	20

## I. 位置と環境 (第1図、表1、PL.1)

粟生遺跡は1953年の7・18水害のおり、縄文時代中・後期の土器片、石鏃等の発見により遺跡として周知されるに至った。遺跡の所在する有田郡清水町は、その四方を700～1000m前後の高峰に囲まれ、町域の8割以上が山地である。この山間地を、高野山に源を発する有田川が曲折しながら西流、金屋町、吉備町を経て、有田市に至り紀淡海峡に注ぐ。粟生遺跡はこの有田川の右岸に形成される舌状、あるいは三日月状の河岸段丘上に位置する。遺跡周辺の現在の地表面は、標高113～116m前後であり、有田川との比高差は約8～11mを測る。有田川は当段丘付近で大きく屈曲し、また、遺跡周辺と東方の山地裾部に挟まれた現在の県道一帯が一段底くなる地形や、水害時の状況などから、かつて遺跡の東側に有田川の旧支流があったことを想定することも可能である。

有田川流域には、10ヶ所余りの縄文時代遺跡の存在が知られているものの、これまで本格的な調査の手が入れられたことはなく、その内容については不明確なものも多い。

周辺の縄文時代遺跡を概観すると、上流域には、宮滝式の注口土器が完形で出土した中期から晩期に至る西原遺跡、後期の葛籠遺跡、晩期の清水遺跡などがある。下流には、中期の岩野河遺跡、土製の耳栓や後期前半の土器が多量に発見され集落遺跡と考えられる糸野遺跡、中期初頭の神戸遺跡等がある。また、石棒・異形部分磨製石器などが金屋町内にて発見されている。有田市の沖合に浮かぶ地ノ島からは、中期初頭の鷹島式土器、後期から晩期にかけての土器が多量に出土し、また、縄文時代のものではないが人骨4体が発掘調査により確認されている。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は、吉備町・有田市周辺に数多く存在するが、金屋・清水町においてはあまり知られていない。これは、この時代の遺跡が存在しないのではなく、未だ発見されていないものと考えらるべきであろう。

この他、清水町内には、1966年に発掘調査が行なわれ、瓦器碗等中世の遺物が数多く出土した日光神社遺跡、阿瀬川城跡をはじめとする南北朝時代から近世にかけての城跡などがある。

その他の遺跡については一覧表を参照されたい。<sup>註1</sup>

## II. 調査の経過と方法 (第2図)

### 1. 第1・2次調査

第1・2次調査は県道改良工事区間の北側部分について、遺構および遺物包含層の確認を目的として行われた。第1次調査では、平安時代から中世に至る遺物を検出したが、遺構は認めら

れなかった。第2次の調査は、数ヶ所に試掘坑・溝を設定し行われ、主として調査区の南側部分において、中世の遺物包含層、土壌墓、ピット等が検出された。また、数ヶ所で縄文時代の遺物包含層や同時代の土壌、ピットが確認されている。<sup>註2</sup>

## 2. 第3次調査(本年度)

本年度の調査は、第1・2次調査において遺物包含層・遺構の確認された地区を対象として行い、また、未確認である工事区間南側部分についての試掘調査も併せて実施した。

調査は水田・畑の畔など現状の地割りを利用し、A～Gの地区を設定し行った。客土および耕作土・床土については機械掘削とし、包含層以下については人力によった。試掘調査は、原則として1辺3m四方の区画を設定、包含層・遺構を検出した地点については1部拡張し、その範囲の確認に努めた。

実測基準線は、調査区内に任意の原点を設定し、磁北方向に合わせたものを使用した。

## 3. 層序

各地区の基本層序は第2図に示した通りであるが、前述したように第1層・耕作土、第2層・床土については重機により掘削を行った。第3層は近世から縄文時代にかけての遺物を含み、灰茶褐色ないし暗茶褐色を呈する砂質土であり、調査区全域に認められる。各地区によって厚さは異なり、また、数層に分層することも可能であるが、上の層からの遺物出土量は乏しい。第4層はA区の一部とB・C区にのみ堆積し、地区により黄茶褐色・茶褐色の砂質土、淡褐色で礫を多く含む砂質土、明黄色の弱粘質土に分かれる。新しい時期の遺物を含まず、縄文時代の包含層と考えられる。B区には上下2層の縄文時代包含層があり、上層である茶褐色土を除去した段階で遺構の検出を試みたが、プランの把握が困難であるため地山面まで掘り下げた。他の地区においても遺構の検出は全て地山面で行った。地山は各地区によって異なるが、大きくは次の2つに分かれる。A・B区に広がり礫を多く含む黄褐色土と、C～F区からG区の北側にかけての黄色若しくは灰褐色の砂質土である。G区には整地層かと思われる礫を含む褐色土が一部に広がる。一部小トレンチを設定し、確認を行ったが、遺物は含まれていなかった。

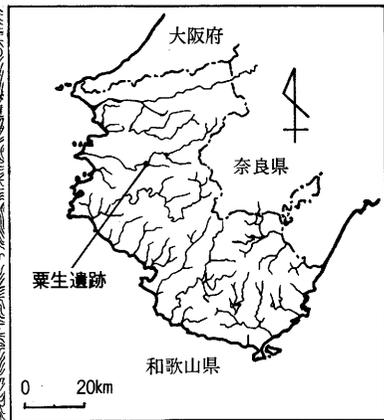
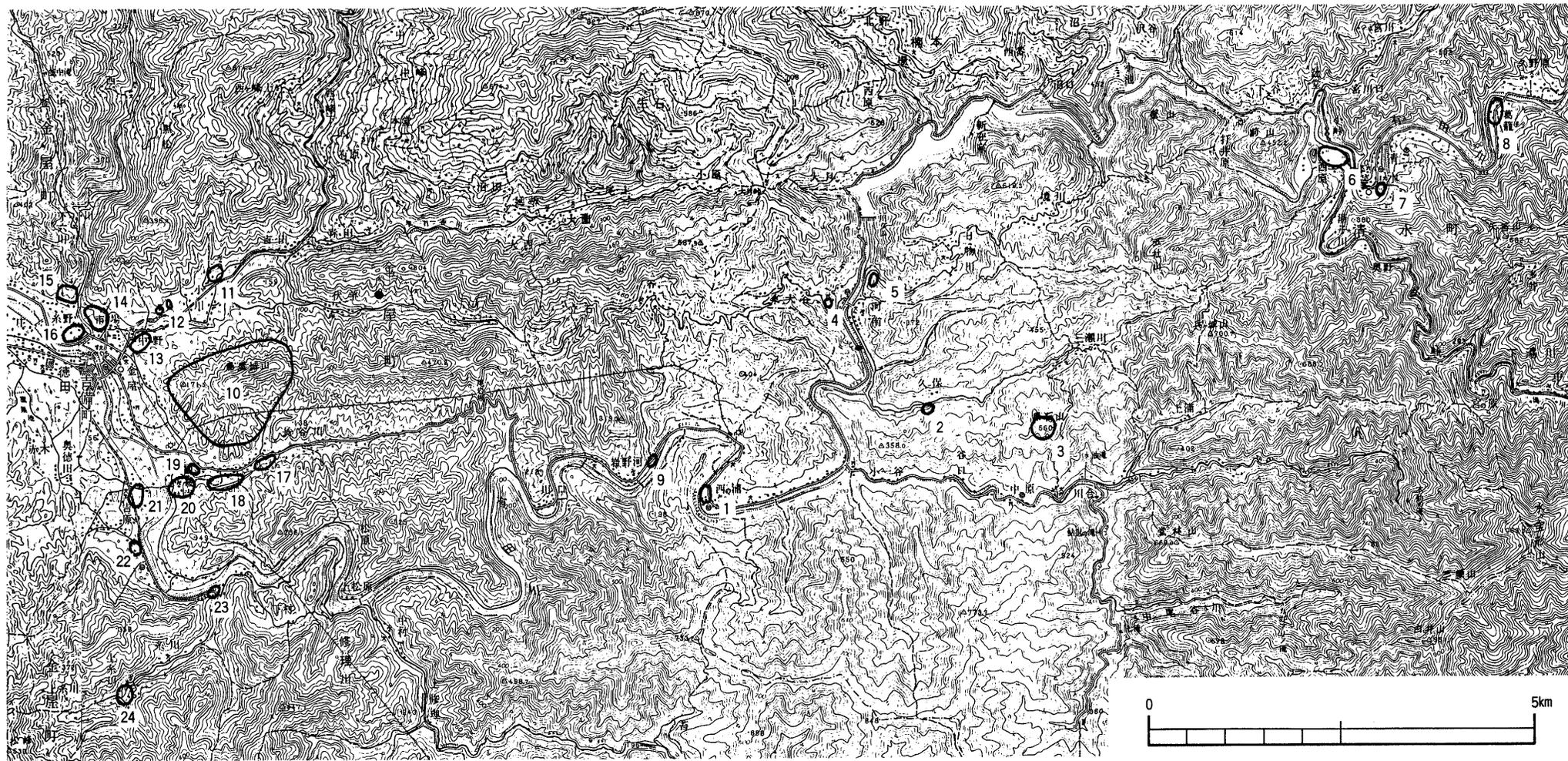
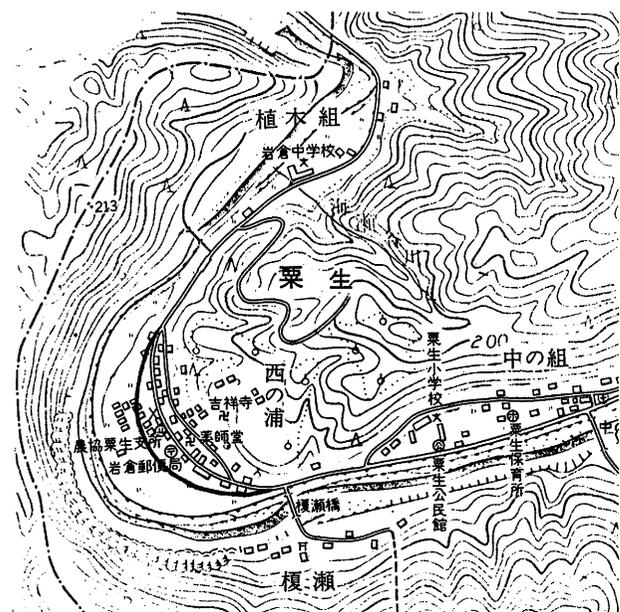
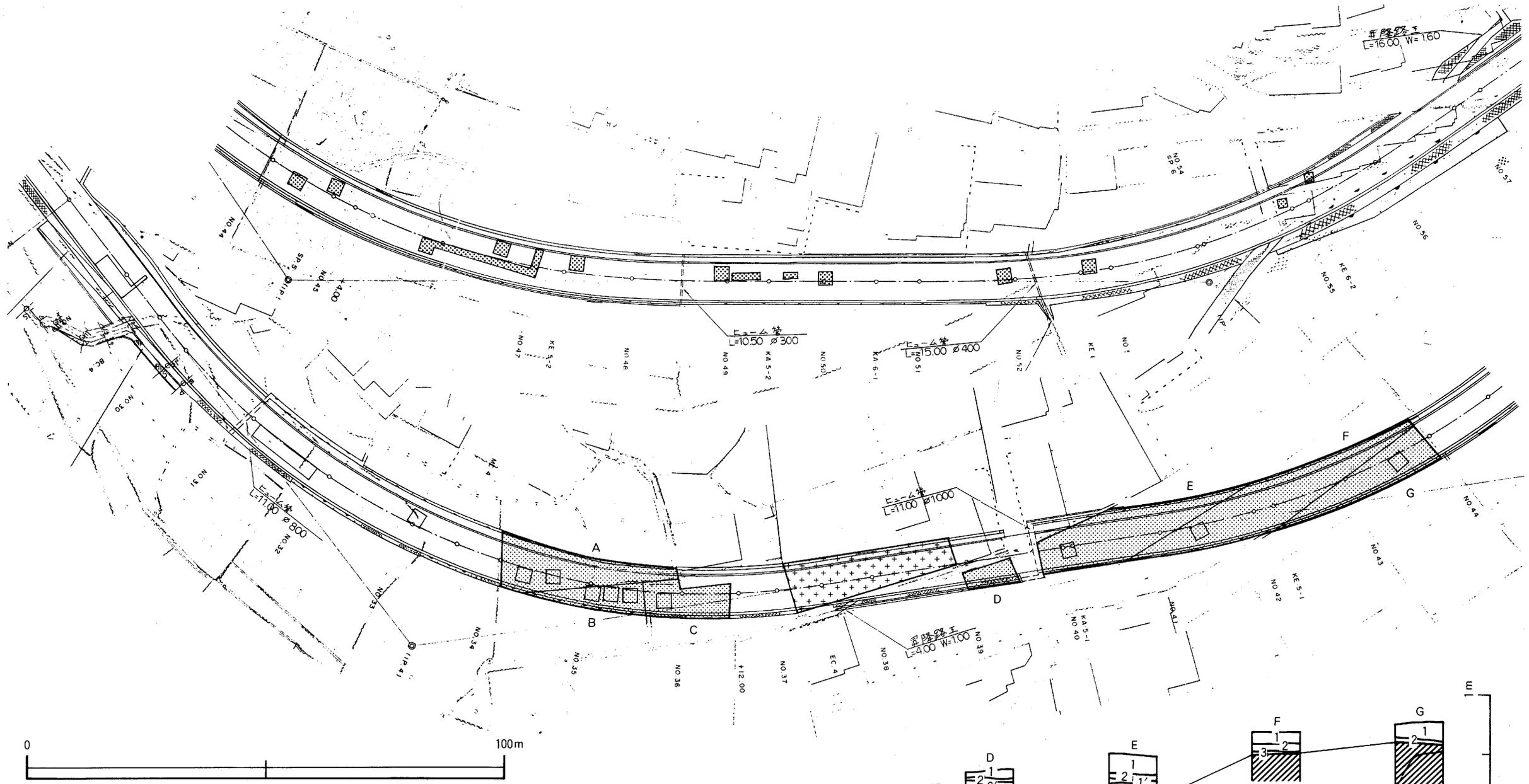


表1 周辺遺跡一覧表

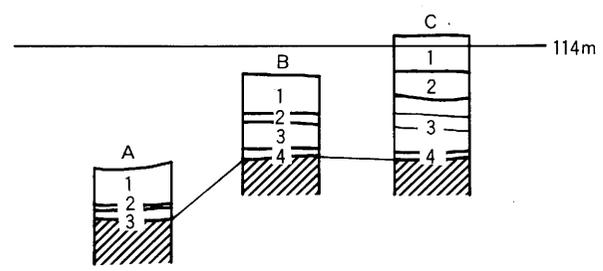
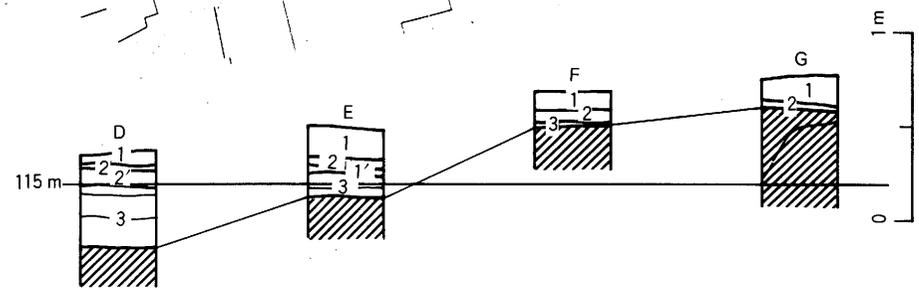
No.	名称	種類	時代	備考	No.	名称	種類	時代	備考
1	粟生遺跡	散布地	縄文	サヌカイト, 石鏃, 石斧, 縄文土器(中・後期)	13	中井原遺跡	散布地	縄文	石器
2	三瀬川遺跡	散布地	縄文		14	市場遺跡	散布地	縄文	石器
3	阿瀬川城跡	城跡			15	旧成道寺跡	寺院跡		
4	東大谷経塚	経塚		和鏡	16	糸野遺跡	散布地	縄文	石鏃, 石斧, 土製耳飾
5	天城跡	城跡			17	岡の前遺跡	散布地	縄文	石器
6	西原遺跡	散布地	縄文	石鏃, 縄文土器(後期)	18	馬の谷遺跡	散布地	縄文	石器
7	清水遺跡	散布地	縄文	石鏃(晩期), 縄文土器	19	下歓喜寺遺跡			
8	葛籠遺跡	散布地	縄文	縄文土器(後期)	20	明恵上人遺跡	石塔		
9	岩野河遺跡	散布地	縄文	縄文土器	21	村里遺跡	散布地	縄文	石鏃, 石槍, 須恵器, 土師器, 瓦器
10	鳥屋城跡	城跡		小刀, 瓦器, 銅仏	22	神戸遺跡	散布地	縄文	石器, 縄文土器
11	小川遺跡	散布地	縄文	石器	23	糸川遺跡	散布地	縄文	石鏃
12	白岩丹生神社遺跡	散布地		瓦器	24	天満前遺跡	散布地	縄文	石器, 縄文土器



第1図 粟生遺跡とその周辺



- 
 第1次調査区
- 
 第2次調査区
- 
 第3次調査区
- 
 第3次調査(試掘)区



第2図 調査地区と各地区基本層序

### Ⅲ. 遺 構

#### 1. A～C区の遺構 (第3～5・7図、PL. 2～5-1)

##### SD01 (第3図、PL. 4)

A区東側で検出した溝あるいは溝状の遺構である。最も深い部分で検出面より0.8～0.9mを測る。西肩を検出したのみで幅については不明である。埋土は主に灰茶褐色系の砂質土と灰色系の粘質土、および黒灰色の砂礫層に分かれる。溝の底は粘土層となり、7層・9層の堆積する部分が最も深い。それより東はやゝ高くなり比較的平らである。今回溝として調査を行ったが、あるいは自然地形とも考えられる。その場合1段低くなる部分のみが人為的な掘削によるものであろう。出土遺物には瓦器椀など中世の土器類の他、石器、縄文土器などがある。

##### SK12 (第4図、PL. 3-2)

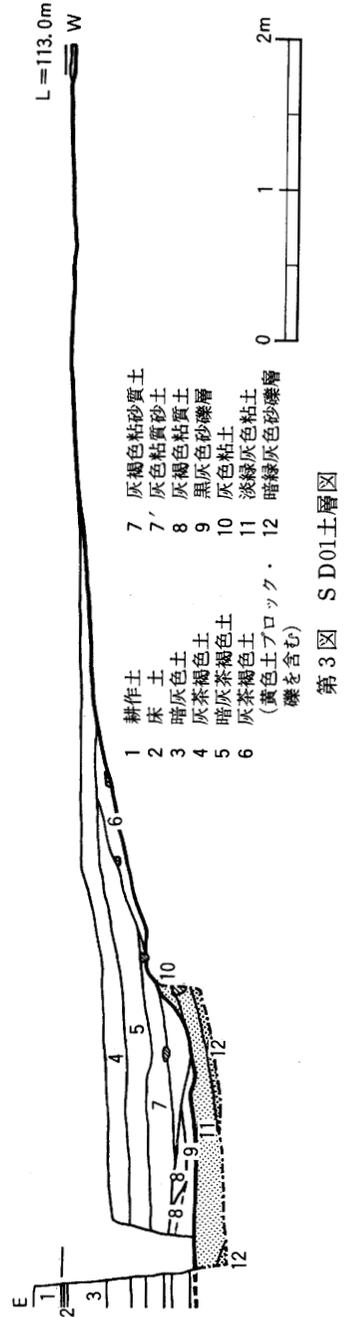
A区北西で検出された不定形な土壌である。2つ以上の土壌が重なっていると思われるが前後関係等は不明である。南東部のものが最も深く、1辺0.8m前後のやゝ丸みを帯びた方形のプランを呈し、深さは0.3mを測る。土壌内には15～30cm大の河原石が数個埋っていた。出土遺物は縄文土器の粗製深鉢、底部119などがある。

##### SK16・30 (第4図、PL. 3-2)

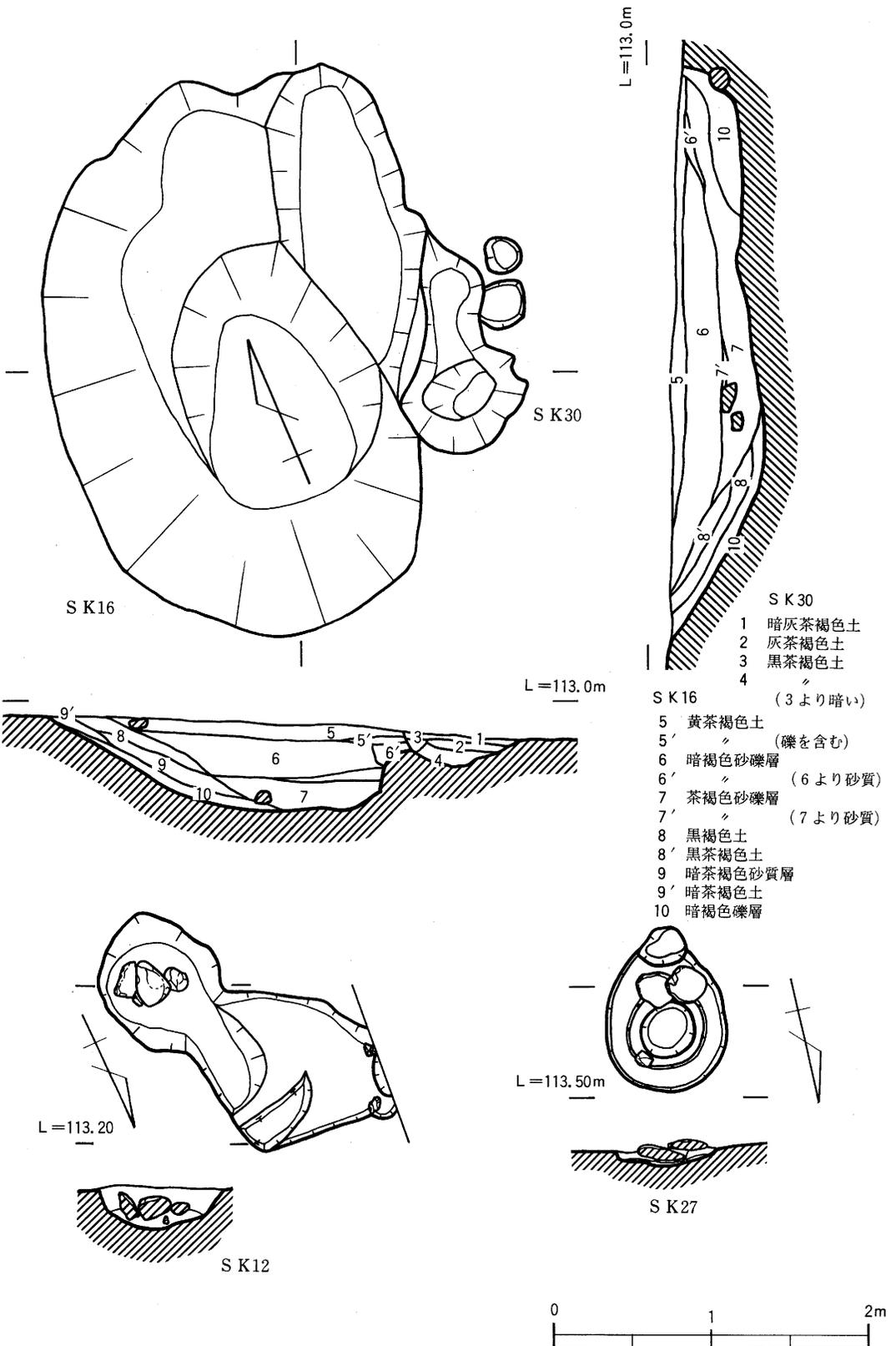
SK16は2.5m×3.5m、深さ0.6mを測る楕円形に近い大形の土壌である。埋土中に多くの礫を含み、北および東肩では直角に近く落ち込むが、南・西では比較的ゆるやかな落ち方を示す。また、底面は南側部分で1段低くなる。SK30はこのSK16を切り込む不整形な土壌で、深さは0.20mである。遺物の出土量は比較的多い。SK16からは81・84・103・128が出土する。SK30出土のものはいずれも細片であり図化し得ない。

##### SK27 (第4図)

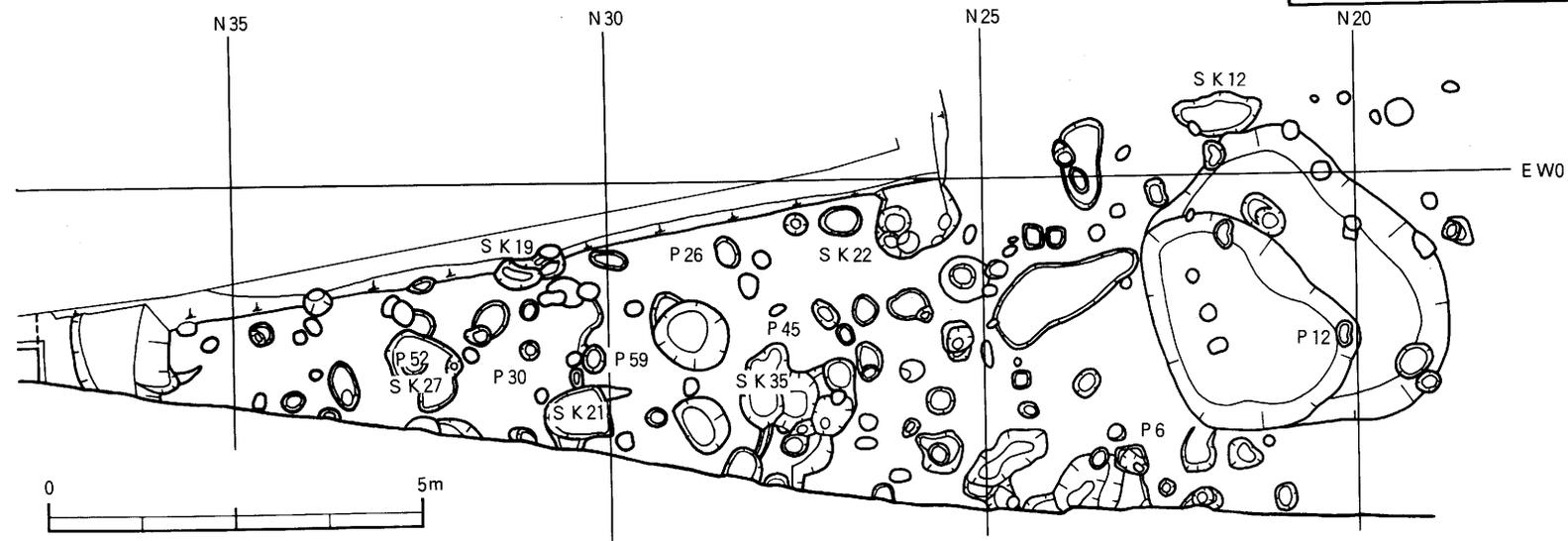
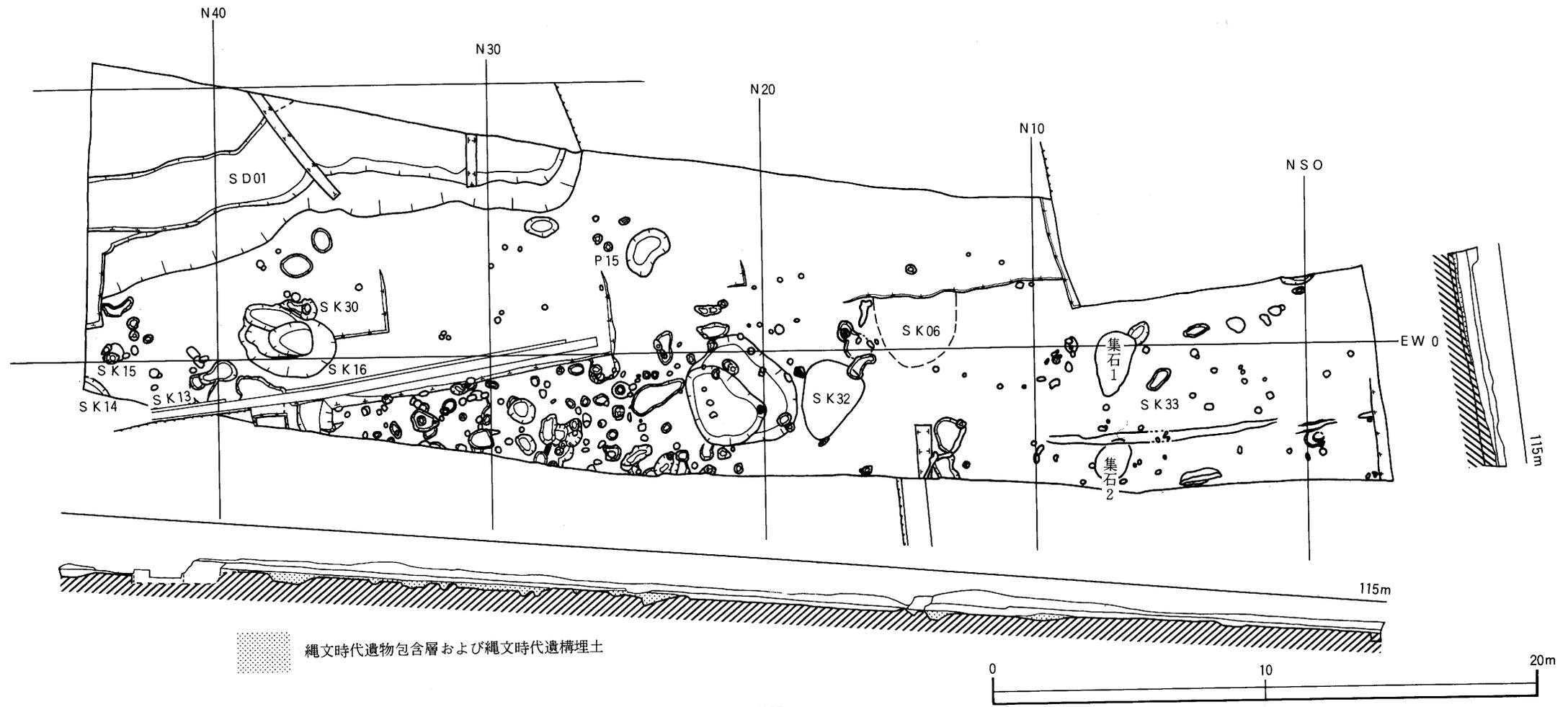
半径0.8m前後の円形に近い土壌。深さは0.15mであるが上部は後世の削平をうけていると思われる。長さ25cm・厚さ10cm程の偏平な河原石を2枚横に置く。少量の遺物が出土する。細片であるが縄文時代のもものと判断される。



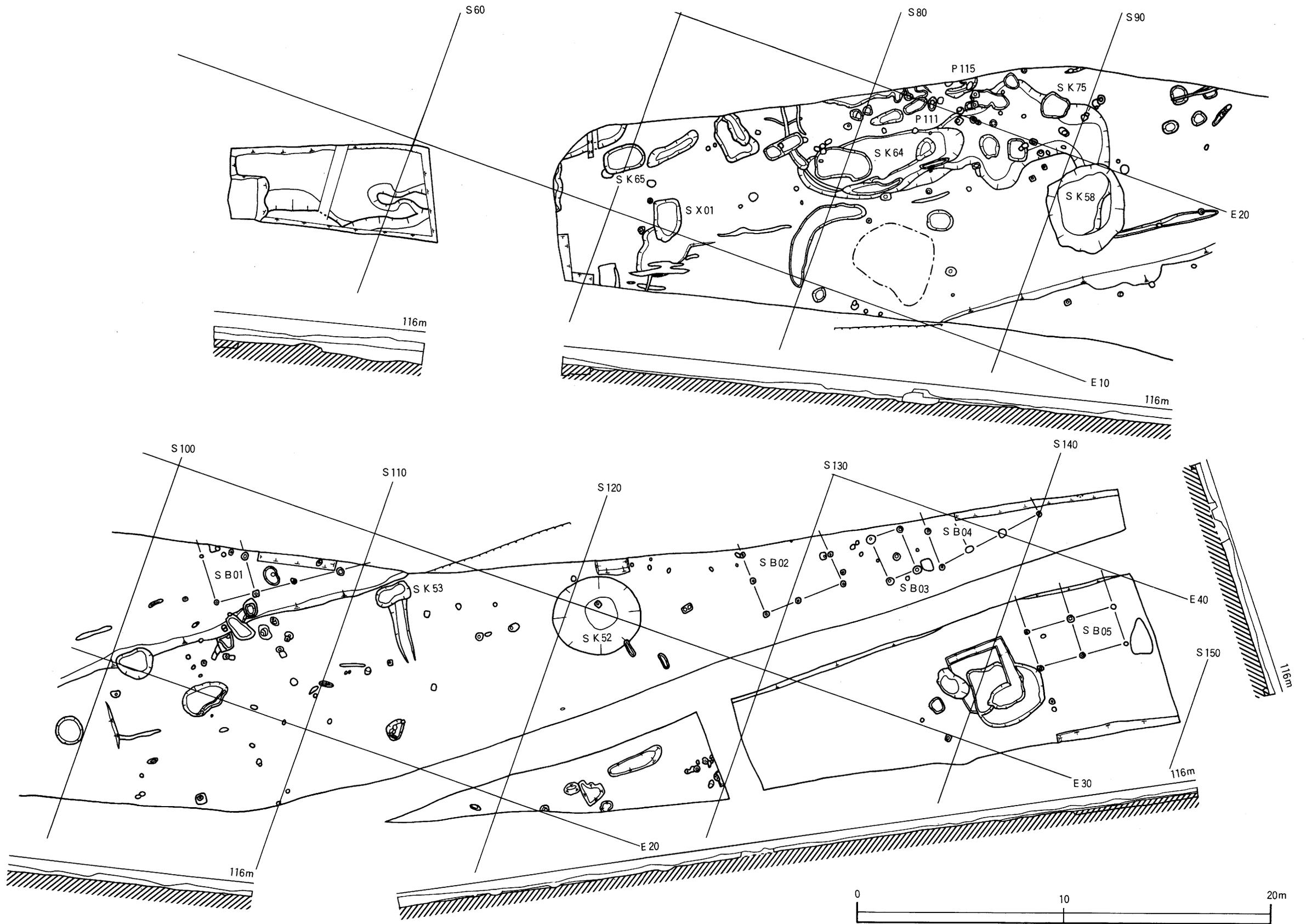
第3図 SD01土層図



第4図 S K 12・16・27・30実測図



第5図 A~C区遺構全体図

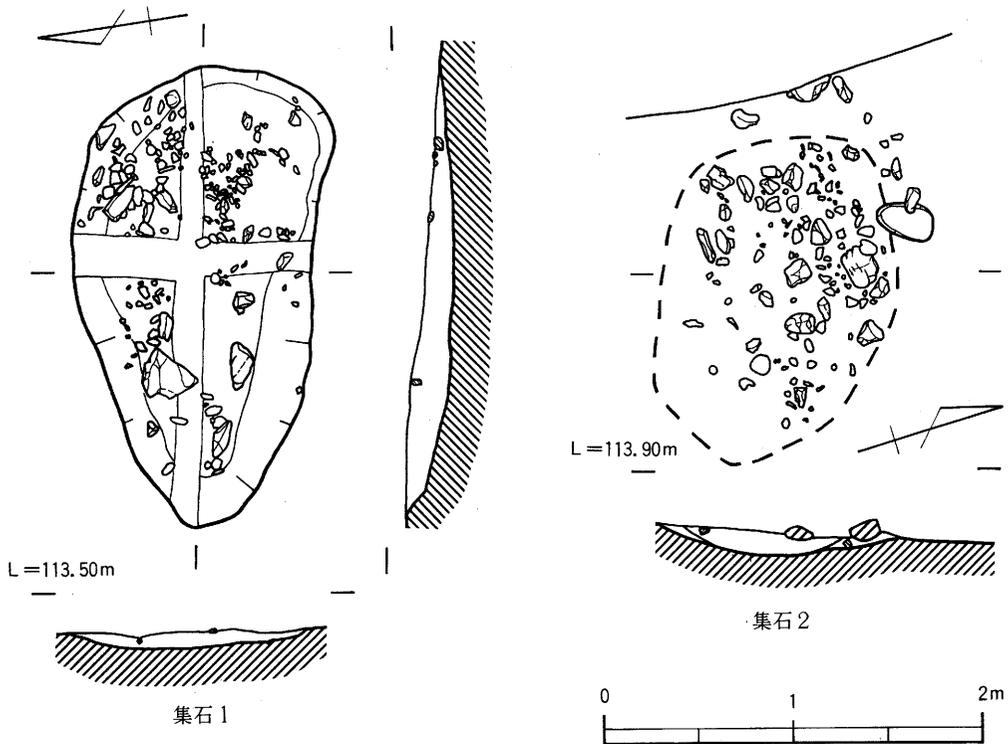


第 6 図 D~G区遺構全体図

**集石1・2** (第7図、P.L.5-1)

集石1は長軸2.4m、短軸1.3mを測り、20~30cm大の石数個と、10cm以内の小礫で構成される。地山面を深さ約0.2m前後掘りくぼめており、底面はほぼ水平に近い。

集石2は約20cm大の石と5~10cm内の小石を集め1.2m×1.8mの丸みを帯びた楕円形を形づくる。周辺の地山には礫が含まれるため、断ち割りをを行い観察を行ったところ、約0.1m地山を掘り込んでいた。遺物は検出されず、その性格については不明であるが、縄文時代の土壙墓の可能性が考えられる。



第7図 集石1・2実測図

**B区検出のピット群** (第5図、P.L.2-2)

B区において大小100あまりのピットを検出した。規模は直径10~50cm・深さ5~40cmを測る。断面の形態は真っ直ぐに掘り込むもの、すり鉢状のもの、袋状のものなど様々であり、その多くは縄文時代の柱穴等と思われる。2層ある包含層の下層上面を遺構面とするピットもあり、少なくとも2時期にわたるものと考えられるが、明確に遺構に伴う土器が少ないことなどから、個々の所属時期については明らかにし得ない。規模・埋土などからいくつかのグルーピングも可能であるが、積極的に住居跡として主張し得るものではない。また、炉やそれに類似する施設も検出されていない。

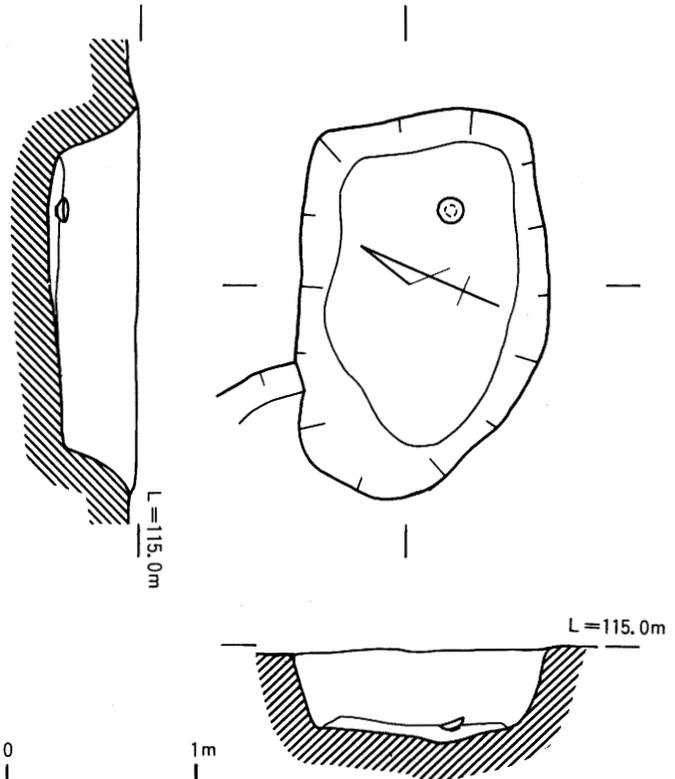
## 2. D 区 の 遺 構 (第 6 図、P L. 5-2)

第 1 次調査区の南西方向にあたり、包含層が0.4~0.6m 堆積する。地山は黄色・灰黄色の砂層である。明瞭な遺構は存在せず、溝状の落ち込みや現代の用水路に伴う石垣を検出したにとどまった。包含層からは瓦器・土師器173・天目茶碗183などが出土する。

## 3. E~G 区 の 遺 構 (第 6・8~12 図、P L. 6~10)

### S X 01 (第 8 図、P L. 8-1)

東西長約 2 m、南北長 1.3 m を測る長方形のプランをもつ土壌墓。南西部分がや、狭くなるため、五角形に近い形となる。第 2 次調査において 1 部を除き検出済みである。底面の規模は 1.8 m × 1 m あり、深さは約 0.4 m である。部分的に凹むものの、ほぼ平らであり、西から東へ若干傾斜する。瓦器碗 137 が完形で出土する。口縁部を上にし、底面より約 2 cm 高い位置で検出される。主軸は E-22° N である。



第 8 図 S X 01 実測図

### S K 65 (第 9 図、P L. 8-2)

長軸 2 m、短軸 1.2 m、深さ 0.15 m を測る土壌。北辺でや、直線的と

なるが楕円形のプランを呈する。埋土には炭が多く含まれており、底面には 1~2 mm の厚さで焼土が堆積していた。土師器、青磁碗の細片が出土する。

### S K 58 (第 9 図、P L. 9-1)

1 辺 3.8 m 前後の正方形に近いプランを持つ土壌。深さは 0.4 m を測る。埋土は灰茶褐色ないし暗茶灰色の砂質土であり、周辺のベース面である灰褐色砂層とは近似する。30~40 cm 大の河原石が 30 数個検出され、石組の 1 部と考えられるが、原位置を保っているかどうかは不明である。土層断面の観察によれば、埋土は自然な堆積状況を示しており、何らかの目的で使用されたのち放置されたことを窺わせる。出土遺物としては、土師器 165・常滑焼甕 184・青磁碗 180 の他瓦器碗・瓦器皿などがある。

**S K 75 (第10図)**

S K 58の北東に位置し、南北1.3m・東西1m・深さ0.2mを測る。隅の丸い五角形を呈し、埋土は暗灰茶褐色土である。長さ35cm・厚さ15cmの平石を東南隅に置き、埋土中には10~15cm程度の小石が多量に含まれる。出土遺物は備前焼甕の胴部片のみである。

**その他の土壌**

S K 64は長軸8m・短軸3mの楕円形の土壌。深さは0.2mを測り、埋土は灰褐色砂質土、底面はほぼ水平である。土師器皿163・166を出土。S K 53は1.7m×0.8mの楕円形の土壌。遺存度は

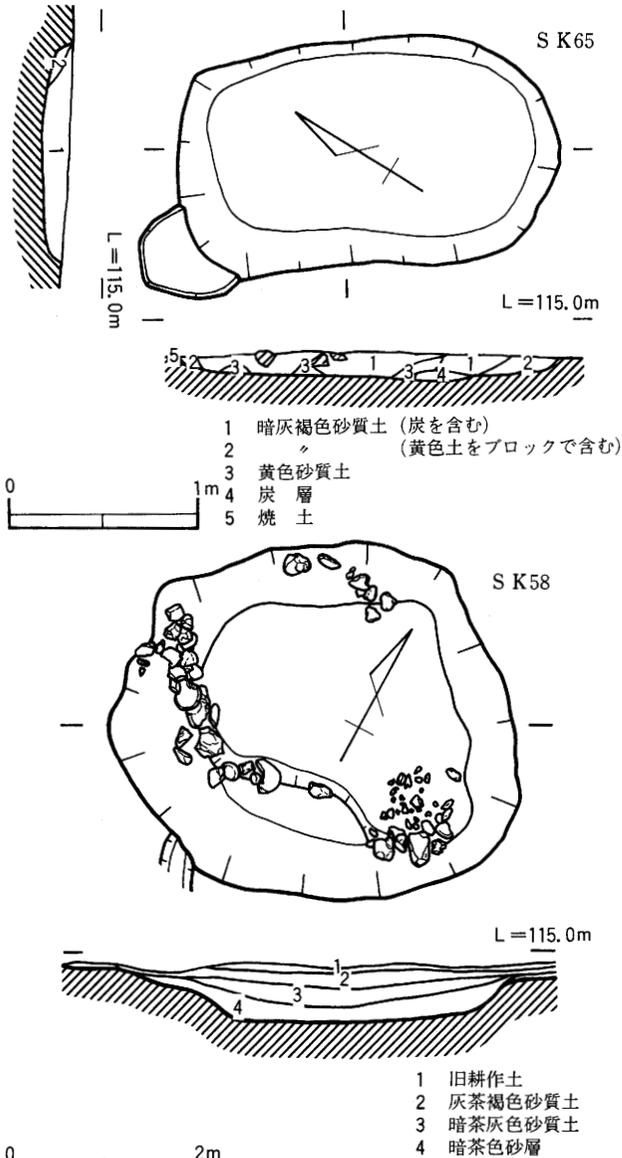
悪く遺構面から5cmを残すのみである。埋土には炭・焼土が多く含まれ、S K 65と同じ様相を呈するものである。瓦器碗149が出土。S K 52は直径4m前後を測る円形の土壌。断面はすり鉢状を呈し、深さ0.3mを測る。瓦器碗143を含む埋土は灰茶褐色砂質土の単一層である。

**S B 01~05 (第11・12図、P L. 9—1・10)**

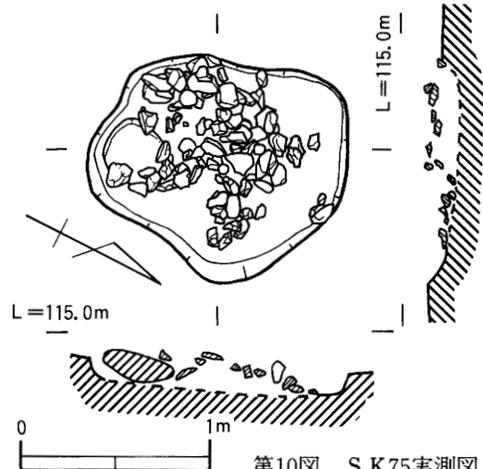
S B 01 南北3間×東西1間分を検出。

南北方向をN-34.5°Wにおき、柱間は南北約2m・東西1.8m、掘形は最大0.4m、深さ0.5mを測る。

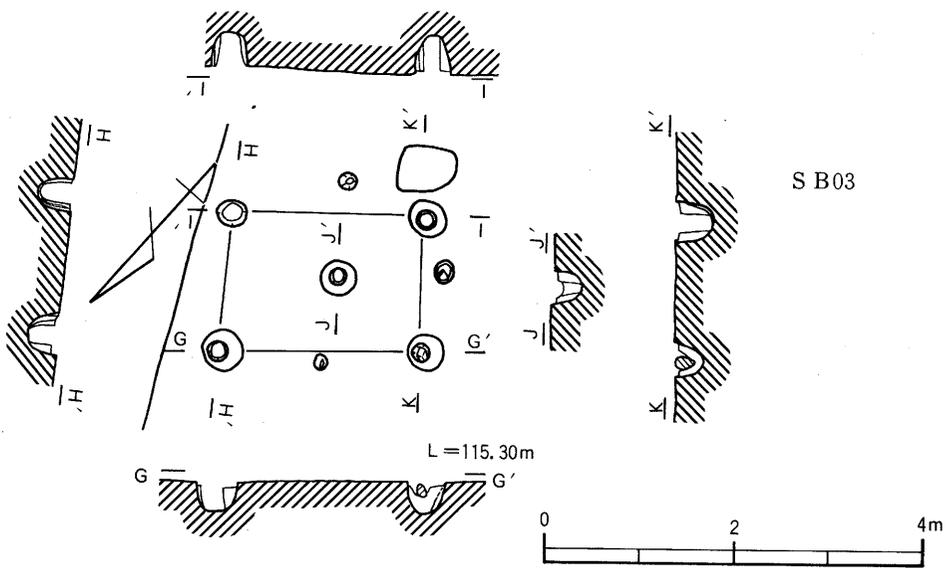
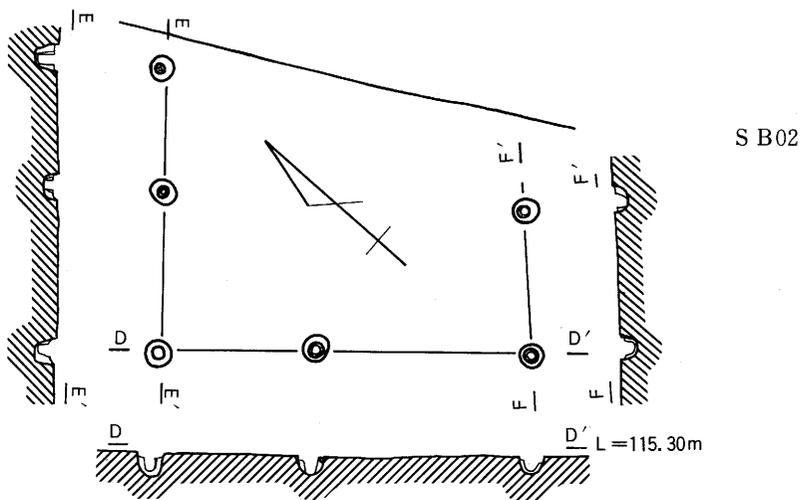
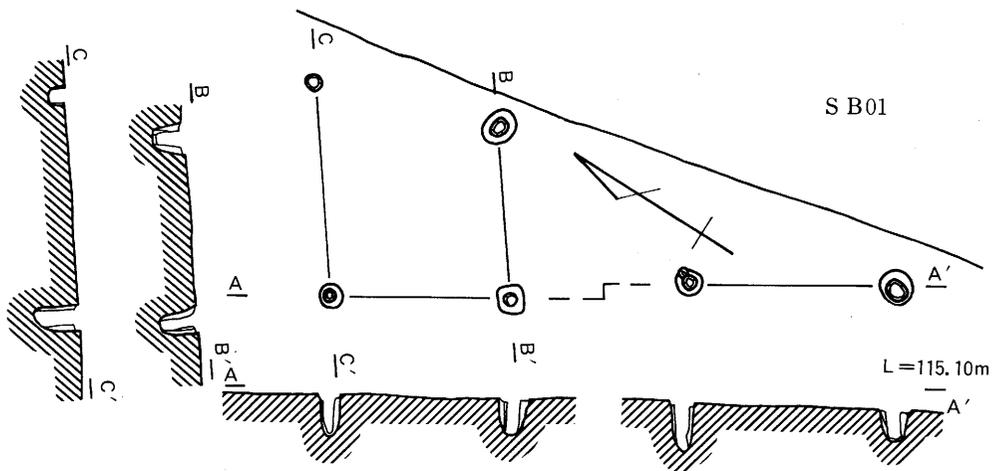
S B 02 南北2間×東西2間を検出。南北棟の建物と思われる。柱間は桁行1.7m・2.3m、梁行1.4m・1.7mと不揃いである。掘形は0.2mの円形、深さは0.2mである。



第9図 S K 65・58実測図



第10図 S K 75実測図



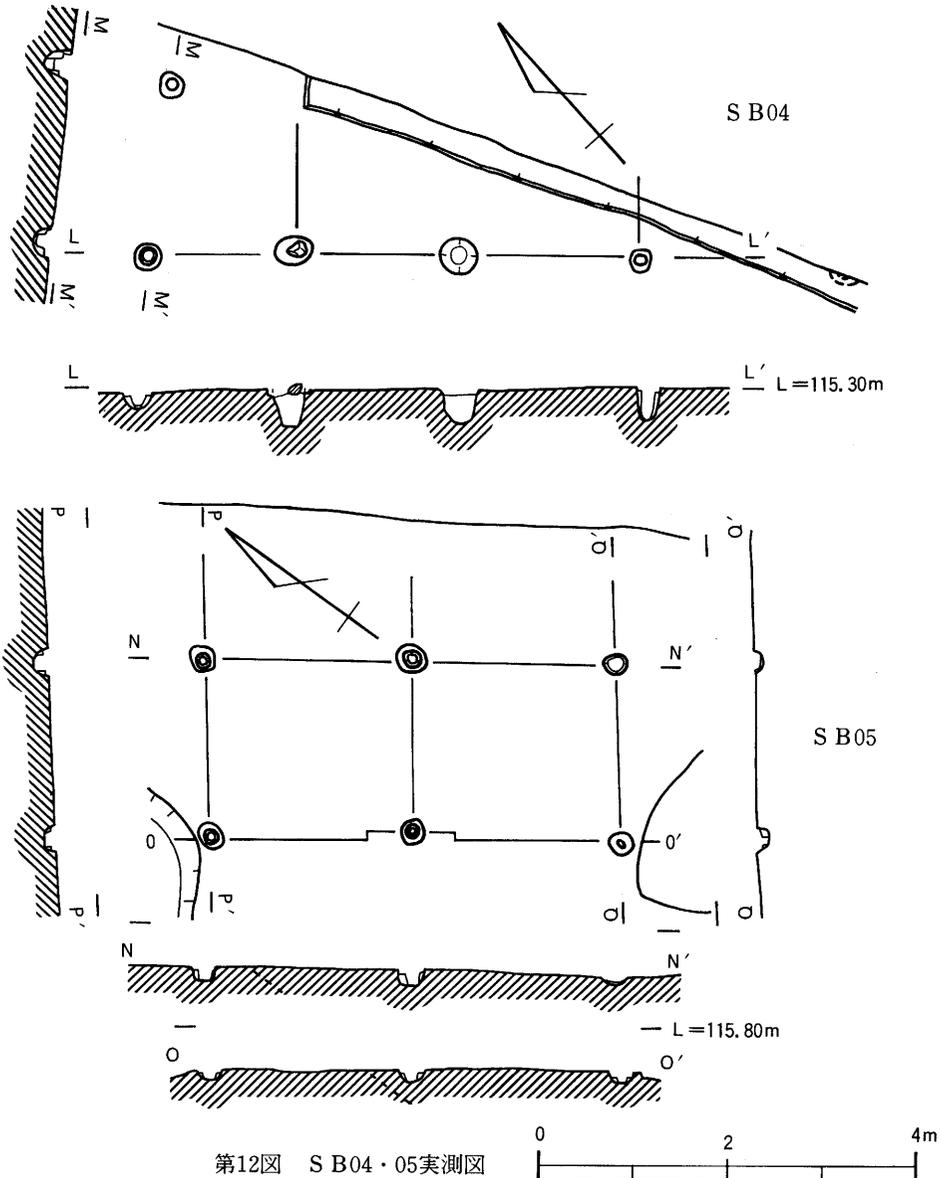
第11图 SB01·02·03实测图

桁行主軸方向は $N-42^{\circ}-W$ である。

S B03 1間 (1.5m)×1間 (2.1m) の規模をもつ。掘形は0.4m、深さ0.4~0.4mを測る。長軸方向は $N-49.5^{\circ}-W$ である。

S B04 南北1間×東西3間分を検出。東西の柱間は西から1.6・1.8・2mと順次広くなる。掘形は0.2~0.4m、深さ0.3m前後である。東西方向を $N-47.8^{\circ}-W$ におく。

S B05 南北2間×東西1間以上の総柱の建物。南北棟になると思われ、3間×2間程度の規模が考えられる。桁行方向を $N-35.5^{\circ}-W$ に持ち、桁行1間2.2m、梁行1間1.8mを測る。掘形は0.3m、深さ0.1~0.15m、柱心は0.15m前後である。



第12図 S B04・05実測図

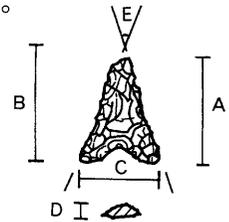
## IV. 遺物

### 1. 石器 (第13・15~17図、表2~4、P.L. 11・12)

第1次~3次の調査を通じて、石器および剥片・碎片が多量に出土している。その大半は中世の遺物を含む第3層から出土したものである。出土地点には偏りがみられ、A~C区に集中する。その全出土量に占める割合は、各々7割・2割となり、特にS D01付近からは多量に検出されている。それに反し、D~G区からは数点出土したにすぎない。試掘調査を実施した地区についても、D~G区と同様な状況を示す。時期については、遺構に伴う例が少ないため、不明確な点も多いが、大半は後述する縄文土器同様、後期初頭~前葉にかけてのものと考えられる。

数千点におよぶ石器・剥片類の内、製品および何らかの調整の認められるものは481点である。種類としては石鏃・石錐・石錘・スクレイパー・石斧・楔形石器などがあり、そのほとんどがサカイトを素材とする。以下、種類別に代表的なものについて記述を行う。<sup>註4</sup>

**a. 石鏃** 石鏃は全て打製である。257点を数えるが、これには未製品は含まれておらず、それらを合わせると300点を越える。作りの粗いものや、他種との判別が困難なものもあり、今後の検討により増減があり得る。基部の形態からI~IV類に分け、I類一凹基無茎式については<sup>註5</sup> 挟りの形状からさらにa~dに細分を行った。時間的制約により42点を図示し、図示したものについては第13図に従い計測を行った。A—現存



第13図  
石鏃計測部位凡例

長、B—復元長、C—器幅、D—器厚、E—先端角度である。計測値は表4に示す。

I a類 (1~18) 凹基無茎式のもので大きさ、平面形態とも様々である。117点を数え、分類可能な257点中45.5%を占める。15は未製品の可能性がある。器長は25mm前後と20mm以内のものに分かれる。重量では、0.5g未満・0.5~0.8g・1g以上の3グループにまとまりをみせる。挟りは丸いものが多く、片面あるいは両面に大剥離面を残すものが半数近くを占める。また鋸歯状に側辺を調整するものが14点ある。

I b類 (19・20) いわゆる鋸形鏃とよばれるもので13点出土する。平面形態が正三角形に近く、多くは左右対称である。

I c類 (21・22) 直線的な挟りを有するもの。17点を数える、全体に造りが丁寧である。

I d類 (23~30) 挟りが浅く平基に近いもの、56点。大型のものも多く、重量はI a類の平均0.69gに対して0.84gと重い。正三角に近いもの(23~25)、五角形のもの(27)などがある。

II類 (31~35、201~205) 平基無茎式のもので40点出土。器長・重量共にばらつきがある。器厚は4mm以上の厚いものが多い。全体に造りは粗く、そのほとんどが片面に大剥離面を残す。

III類 (36~38、206) 円基式、5点出土。器長は20mm以上のが大半を占める。37・38は片面の

側辺一方が未調整である。

IV類 (39~42、207~212) 尖基式のもので9点出土。器長30mm以上、重量2g 以上のものが多い。211・212は今回IV類として分類したが、重量0.35g と極めて小型のものであり、検討を要する。39・210は尖頭器形のもの、41は菱形を呈する。213~217は未製品。

表2は計測したものについて、長さとの比率を示したものである。I類は長さ15~20mmで正三角形に近いもの、25mm前後のや、縦長のものに分かれる。II~IV類は幅15~20mmに集中するが、長さは16~35mmとばらつきがある。表3には重量の計測可能な128点について、その分布状態を表わした。各種の平均値は、I a—0.69・I b—0.68・I c—0.51・I d—0.84・II—1.30・III—1.52・IV—2.49g、全体の平均重量は0.90g である。

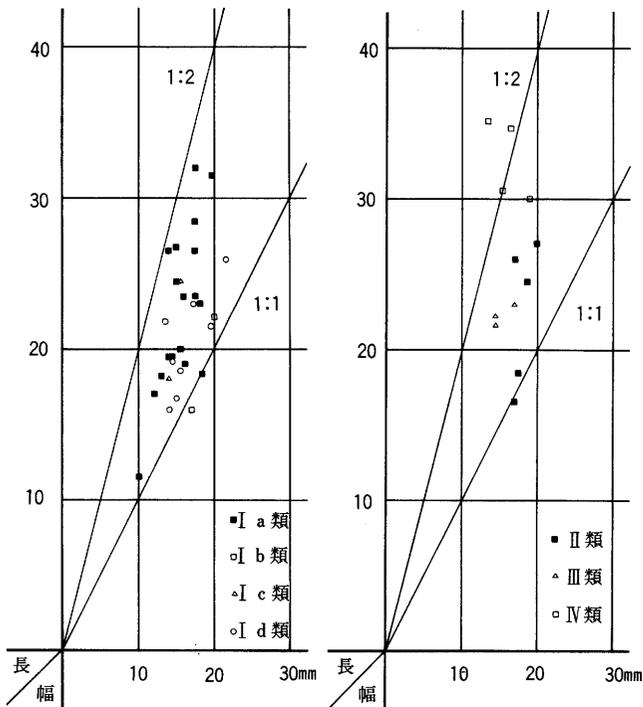


表2 石鏃の長さとの比率

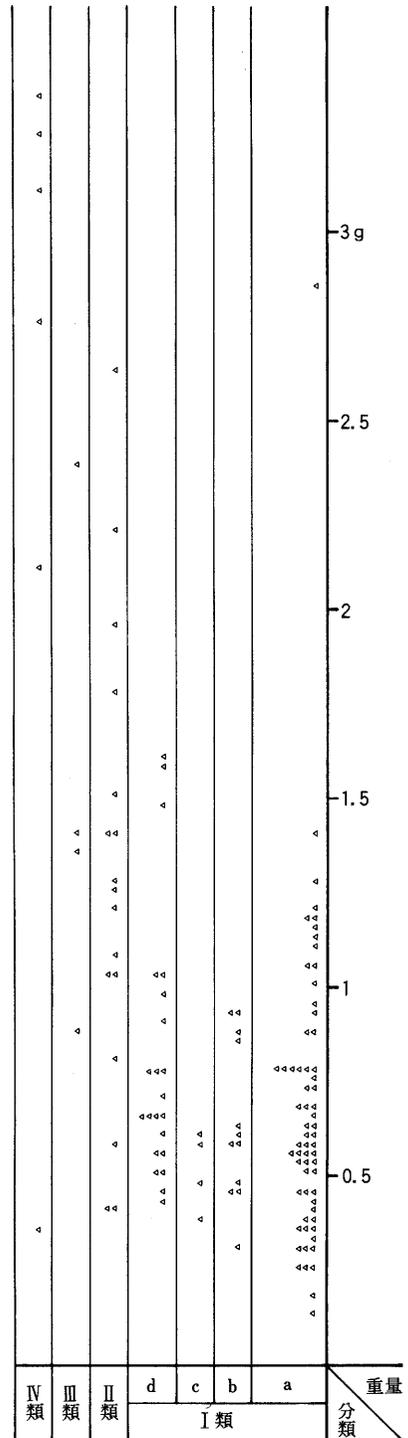


表3 石鏃の重量分布

No.	分類	器長(mm)	器幅(mm)	器厚(mm)	重量(g)	角度(°)	地区	層	備考	No.	分類	器長(mm)	器幅(mm)	器厚(mm)	重量(g)	角度(°)	地区	層	備考
1	I a	11.5	10.0	2.0	0.14	41.0	AN	3		22	I C	(15.5) 24.5	15.0	1.4	(0.42)	(33.0)	B	4	裏
2	〃	18.2	13.0	2.5	0.44	45.0	B	3	○表	23	I d	18.5	15.5	2.2	0.52	51.0	AN	3	○
3	〃	17.0	12.0	1.8	0.33	47.0	AN	3	○	24	〃	16.0	14.0	3.0	0.66	49.0	〃	5	○裏
4	〃	(17.2) 19.5	14.0	3.5	(0.59)	(45.5)	〃	〃	○	25	〃	(16.5) 16.8	15.0	3.2	(0.45)	(58.0)	AS	3	
5	〃	19.5	14.6	2.2	0.52	45.0	〃	7		26	〃	19.5	14.5	2.5	0.66	45.0	B	2	
6	〃	19.1	16.0	2.5	0.69	53.0	〃	3		27	〃	21.7	13.6	3.3	1.04	58.0	AN	3	表裏
7	〃	20.0	15.5	3.5	0.80	56.0	〃	〃		27	〃	23.0	17.4	3.9	1.63	43.0	〃	〃	
8	〃	18.6	18.5	3.4	1.06	66.5	〃	SD01 Sペルト		29	〃	21.5	19.5	2.5	1.60	64.0	〃	4	
9	〃	(22.0) 24.5	15.0	2.7	(0.78)	(39.0)	B	3	裏	30	〃	26.0	21.4	3.5	1.49	50.5	〃	3	
10	〃	(21.0) 23.4	16.0	3.0	(0.64)	(41.0)	〃	〃	裏	31	II	16.5	17.0	2.5	1.10	64.0	〃	4	表裏
11	〃	23.5	17.6	3.7	0.95	47.0	AN	3		32	〃	18.5	(17.5)	4.5	(0.80)	58.5	B	〃	裏
12	〃	(24.1) 26.5	14.0	3.0	(1.05)	29.5	〃	4		33	〃	(21.5) 24.6	18.5	4.5	(1.78)	(44.0)	〃	S-ペルト	裏
13	〃	22.9	18.2	2.6	0.88	50.5	〃	3		34	〃	26.0	17.0	4.0	1.04	46.5	AS	3	裏
14	〃	(26.6) 28.5	17.5	2.5	(1.12)	(38.0)	〃	2	○裏	35	〃	(25.0) 27.0	20.0	3.5	(2.20)	(48.5)	AN	5	裏
15	〃	26.5	17.4	3.6	1.43	57.0	C	8		36	III	21.3	14.6	3.3	1.42	53.0	B	2	
16	〃	26.7	15.0	4.5	1.01	36.0	AS	3	○	37	〃	22.5	14.4	3.5	0.89	67.5	AN	5	裏
17	〃	(26.4) 32.0	17.6	2.6	(0.81)	(32.0)	AN	5		38	〃	23.0	17.0	5.5	2.39	95.0	〃	4	
18	〃	31.5	(19.7)	4.5	2.86	44.0	〃	6		39	IV	(30.0)	(19.0)	(3.6)	(2.10)	(48.0)	〃	3	
19	I b	16.0	17.0	4.0	0.46	75.5	〃	3		40	〃	30.5	15.5	3.5	2.11	42.0	〃	8	表裏
20	〃	(19.5) 22.0	20.0	2.6	(0.87)	(59.0)	2次		裏	41	〃	(32.5)	16.7	4.0	(2.74)	40.0	〃	3	表裏
21	I C	18.2	14.0	2.6	0.39	47.0	AS	3	○	42	〃	35.2	13.5	7.0	3.36	67.0	〃	〃	裏

( ) つきの数字は現存値 器長右数字は復元長  
備考欄 ○: 鋸齒縁 表・裏; 大刺離面の残存面

表 4 石鏃一覧表

**b. 石錐** (43~45、218~222) 43・218は棒状を呈するもので、量的には最も多い。43は現存長32mm、最大幅9.5mmを測り、全体に丁寧な加工を施す。218は両端にそれぞれ錐部を持つ。44・220・221は頭部と小さな錐部を持つ。頭部に調整を施すものは少く、下端を加工し錐部をつくり出す。錐部断面は菱形を呈するものが多い。45は長さ40mmを測り、先細りの下端をそのまま錐部とする。調整は粗雑であり、大剝離面を両面に残す。

**c. スクレイパー** (46・47・223) 10点以上出土する。多くは横長剥片あるいは残核を素材とし、両面からの調整により刃部を作り出す。調整剝離は全体に雑なものも多く、刃部以外の周縁に加工を施すものは少ない。46は一部に原礫面をとどめる。

**d. 石斧** (48) 現存長93mm、幅63.5mm、厚さ25mmを測る磨製石斧。基部的<sup>7</sup>行程と刃部の1部を欠く。平面は基部から刃部にかけて幅が広がる。断面は長辺が丸みを帯びた長方形を呈し、刃部は両刃で外湾する。石斧はこの1点のみである。

**e. 石錘** (49・50) 2点出土し、共に切目を長軸の両端部につくるものである。49は約 $\frac{1}{2}$ を欠損。50は完形品で長さ96.5mm、重さ110gと大型のものである。石材は緑色片岩を用いる。

**f. 楔形石器** (52・53・224~228) 相対する二縁辺に細部調整を施し、これに隣合う<sup>7</sup>一ないし二縁辺に折りとり面、截断面を有するものと、截断を施していない素材に分けられる。50点余りを数えるが、今後、検討を加えれば増える加能性がある。

**g. 不定形石器** (51) 現存長53.5mm・最大幅21.5mmを測る。糸巻形の形態を示すが、その用途については不明である。下半部両面には大剝離面が残る。

## 2. 縄文土器 (第18~22図、P L.13~15)

縄文土器は全てA~C区より出土した。細片が多く、器形の全体を窺える資料は少ない。その中から口縁部、有文土器片など特徴の分かりやすいものを選び出し、時期差を基に次の様に分類を行った。

I類—中津式併行のもの、II類—福田KⅡ式・四ツ池型併行、III類—北白川上層式1・2期併行、これに底部を加えIV類とした。<sup>8</sup>

54は燃糸文を施す中期後葉里木Ⅱ式のものである。中期の土器として現在確認し得たのは、この1点のみである。

**I類** (54~80) 54~60は口縁上端部に縄文を施すものである。55~58は縄文と沈線文、59・60は縄文のみである。口縁が波状になるもの(55・57・58)と水平になるもの(59・60)がある。61は波状口縁の深鉢で擬似縄文を施す。62は口縁部を内側に拡張する。63~68はいずれも山形あるいは波状口縁の波頂部である。63は口唇部に縄文を施文、口縁部にそって施す2本の沈線と、下方へ平行に垂下させた2本の沈線で区画をつくり縄文を施す。64・67は沈線が口唇部にまでお

よぶ。65・66は丸く肥厚させた頂部に穴を穿っている。68は突起部の中央および横方向から穿孔を施す。沈線は平坦化させた上面におよぶ。角閃石を含み、外面は暗茶褐色、内面黒色を呈する。69は口縁上端部に刻み目を入れる。70は口縁部に縄文、穿孔をおこなう。72・75は縦に短く沈線を引く。76は条線文、77は擬似縄文のものである。78は壺の把手部である。縄文と沈線で区画をつくり、渦巻状に施す沈線文を絡ませる。79・80は鉢である。80は外面を丁寧<sup>9</sup>に磨き、焼成も良好である。Ⅰ類の中で、55～57は太い沈線を施しており、中津式でも古い段階のものである。

Ⅱ類 (81～87) 81～83は山形突起である。81は中央部を大きく穿孔する。上端部に深い沈線を施し、頂端部には2孔がある。82は波頂部中央に刺突を施し、その周りを沈線で飾る。上端部は沈線と横方向の穿孔を行う。角内石を含み暗茶褐色ないし黒褐色を呈する。83は上端部の沈線が山形突起の中をも穿っている。突起部中央を内外両面から刺突を行う。以上の土器は四ツ池遺跡<sup>9</sup>に多く類例がある。84・86・86・87は3本沈線を基本とする福田KⅡ式の土器である。86は沈線の先端を互いに絡ませる。内外面を丁寧に磨き焼成も良好である。85は肥厚させた口縁部の両面に沈線文、上端面には沈線と縄文を施す。

Ⅲ類 (88～116) 88は屈曲させた波頂部に刺突文、円形沈線文、孤状沈線文を描く北白川上層1期のもの、89は縦に刺突文を連ねる。波頂部に沿って沈線と縄文を施し、上端面にも縄文を付す。頸部は沈線文で区画し縄文を充填させる。90は中央部を穿孔し、それを中心として円形、孤状、波頂部に浴させたもの、および頸部近くに各々沈線文を描き文様帯を構成する。口唇部、孤状沈線間、頸部付近には無節の縄文を施す。91～94は口縁内面に沈線文、縄文、刺突文を施す。91は口縁を段状に肥厚させる。94は外面にも平行沈線を引く浅鉢。95～97は外面に施文を行うもの。98・99・104・105は小型の鉢であろう。105は羽状縄文を施す。いずれも北白川上層1期と考えられる。106は粗製の深鉢で穿孔されている。109～112は粗製の深鉢である。

113～116は堀之内系の土器である。便宜上、Ⅲ類に含めた。113は十字に突帯を貼付ける。114は縦に貼付けた突帯に刻み目を施す。

Ⅳ類 (117～136) 135・136以外は平底であり、くぼみ底は出土していない。胴部への立ち上がりの状態を確認できる資料は少い。底の薄いもの(123・124・133)と、2cm前後と厚いもの(122・131)とがある。135・136はやゝ丸みを帯び、浅鉢の底部かと思われる。

### 3. 中世の遺物 (第14・23・24図、P.L.16・17)

中世の遺物は全地区にわたって出土する。瓦器、土師器、国産・輸入陶磁器、銭貨などがある。

瓦器 (137～161・174) 椀・皿・鉢・こね鉢がある。137はS X01より出土。口径13.1cm、器高4.2cmを測る。口縁部は強い横ナデのため段をなす。高台は比較的しっかりしており、径は5.2cm。内面のミガキは磨滅のため不明瞭な部分もあるが、見込みから口縁部にかけて連続して行い、

2～3回に輪を連結させるタイプのものである。焼成は良く、黒色ないし灰黒色を呈する。焼成後底裏面に「×」印をヘラ先でつける。

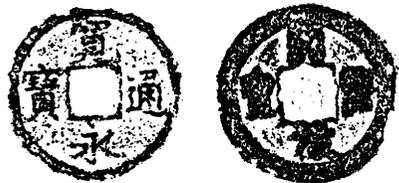
138～140は 137同様口縁部に強くナデを行うタイプである。今回出土した瓦器碗は、口径13～14cm、器高4cm、器壁8mm前後のものが多く、ミガキの幅は3～4mmの太いもの(145)と2mm前後の細いものがある。143・144・148は炭素の吸着が悪く、また、146・150・153の胎土は黄灰色を呈する。高台の形態は、台形もしくはそれに近いもの(140・146・147)と、それ以外の三角形のものに分けられ、径は4～7cmとばらつきがある。口縁部に沈線の施されるものはない。155～160は小皿である。平底で口縁部が比較的直に立ち上がる158・159以外は丸底ふうのものである。口径8cm前後のものも多く、160のみ6.6cmと小振りである。内面にミガキの施されるものはない。鉢(161)は幅2mmのミガキを雑に施す。少片のため口径、傾き等は不確定である。174はこね鉢である。

**土師器** (162～173・229) 皿(162～166)はいずれも指おさえとナデによる調整を行う。胎土は密であるが焼成は軟質のものが多い。164は強い横ナデにより口縁部が屈曲する。口径13～14cmの162・165、10cm前後の163・164・166の2タイプがある。167～173・229は土塼あるいは土釜の類である。多くは口頸部のみであり、体部の形態については不明であるが、167・168・229は鐔の付く器形になると思われる。口縁部は外反させた後、端部を上方につまみ上げる。169・170は端部が凹む。口縁部は横ナデ、頸部外面はナデ調整、内面はハケ目のもの(167・169・171・173・229)とヘラケズリを残すもの(168)とがある。淡茶褐色ないし淡赤褐色を呈し、砂粒を含むが、焼成は比較的良好である。173は短く外反させた口縁端部を丸くおさめるもので、外面はナデ、内面はハケによる調整を行い、内面には口縁部から頸部にかけてススが付着する。

**陶磁器** (177～184・230～233) 175～177・231は備前焼すり鉢である。178は中国製白磁角杯、179・233は線描蓮弁文をもつ中国製青磁碗、180・181は口縁部がや、外反する青磁の碗である。182・230は黒褐色、183は褐色の釉をそれぞれ施す美濃瀬戸系天目茶碗、184は常滑焼甕の破片である。この他、備前焼甕、唐津焼碗などが出土している。

**その他** 土錘(185)、銭貨(第14図)がある。銭貨には、E区包含層出土の寛永通宝と、A区2層出土の北宋銭・紹聖元宝(初鑄・1094)とがある。

以上のうち、瓦器については、その法量・技法等から<sup>註11</sup>13世紀後半～14世紀前半代にかけての時期、その他のものについては、概ね15世紀代を中心とする時期と17～18世紀代とに位置づけられよう。



第14図 銭貨拓影(1/1)

## V. ま と め

今回の調査で検出した遺構・遺物は、縄文時代後期のものと、13～15世紀代のものとに大分することができる。この間、縄文晩期～平安時代については、若干の出土遺物はあるものの、現時点では空白期としてとらえておきたい。

このような空白期の生じた理由としては、水害等の自然現象や後世の削平による遺構・遺物の消失、居住集団の移動など種々の理由を考えることができる。周辺遺跡の消長等とも絡ませ検討を加えるには、本文中でも述べたように、調査による資料が少なく、将来に委ねざるを得ない。1953年の水害時に発見された遺物は、縄文時代中・後期とされており、今回および2次調査で出土した縄文土器の年代（54は例外とする）とは若干の時期差が認められる。実見しておらず、即断は避けたいが、出土地点の相違、あるいは上流域よりの流出に拠るものかと思われる。縄文時代の遺構は、有田川と本年度調査区（B・C区）に挟まれた区域を中心とし、概ね東西50m、南北100mの範囲内に広がりをもつものと推測される。

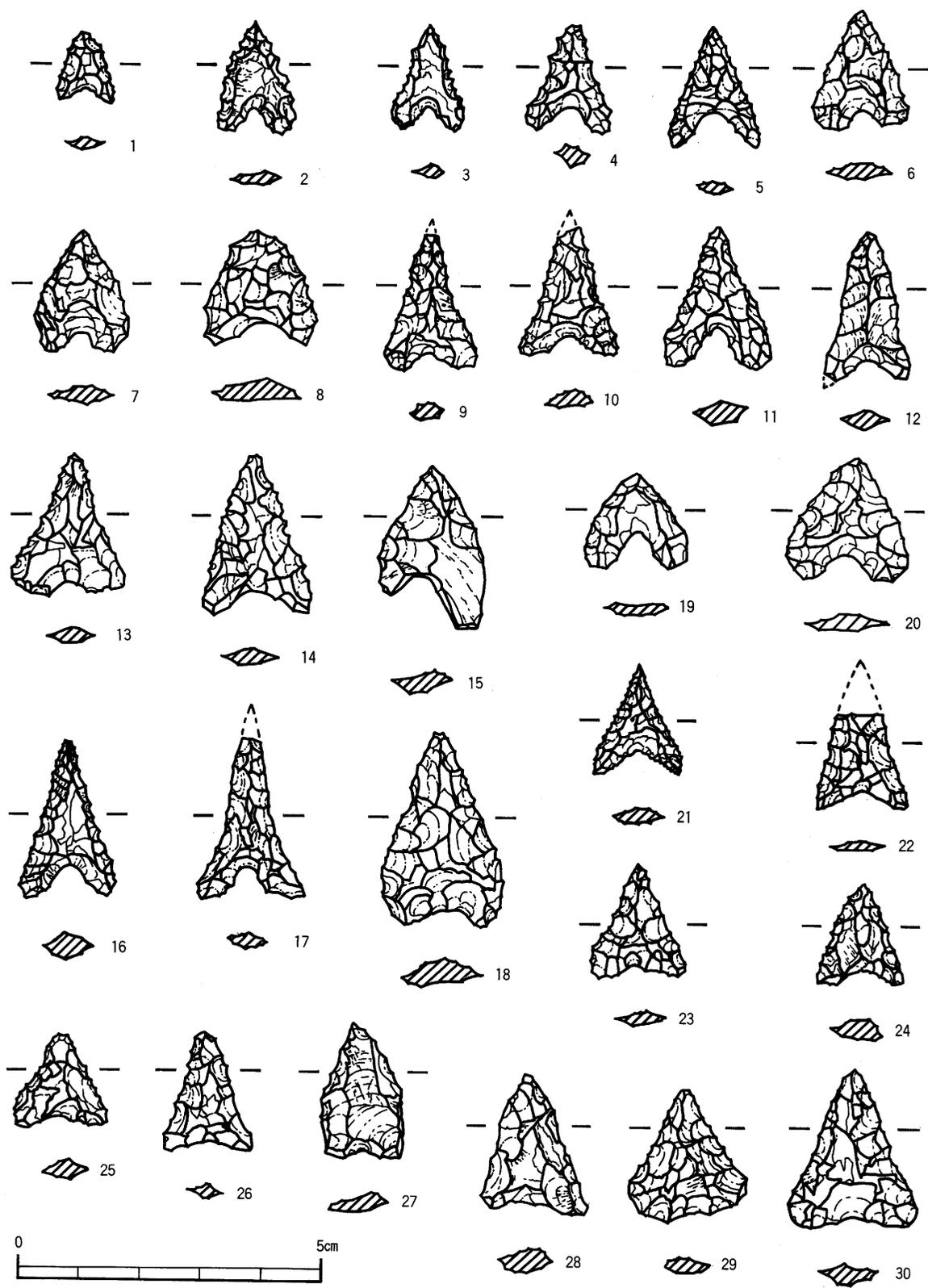
E～G区は、2次調査に於いて土壙墓が検出されている地区であるが、今時の調査では、明確に土壙墓と認められる遺構は検出されておらず、掘立柱建物S B01～05との関連も含め今後課題を残す結果となった。

最後に、本文中で触れられなかった試掘調査の内容について簡単に記しておきたい。前述のように試掘は工事区間南側部分を対象として行った。北側約 $\frac{1}{2}$ の範囲からは包含層および遺構を確認したが、南東域では床土の下は直ちに地山となり、遺物等も検出されなかった。包含層からは、中世の遺物を中心に、近世の陶磁器類などが出土している。

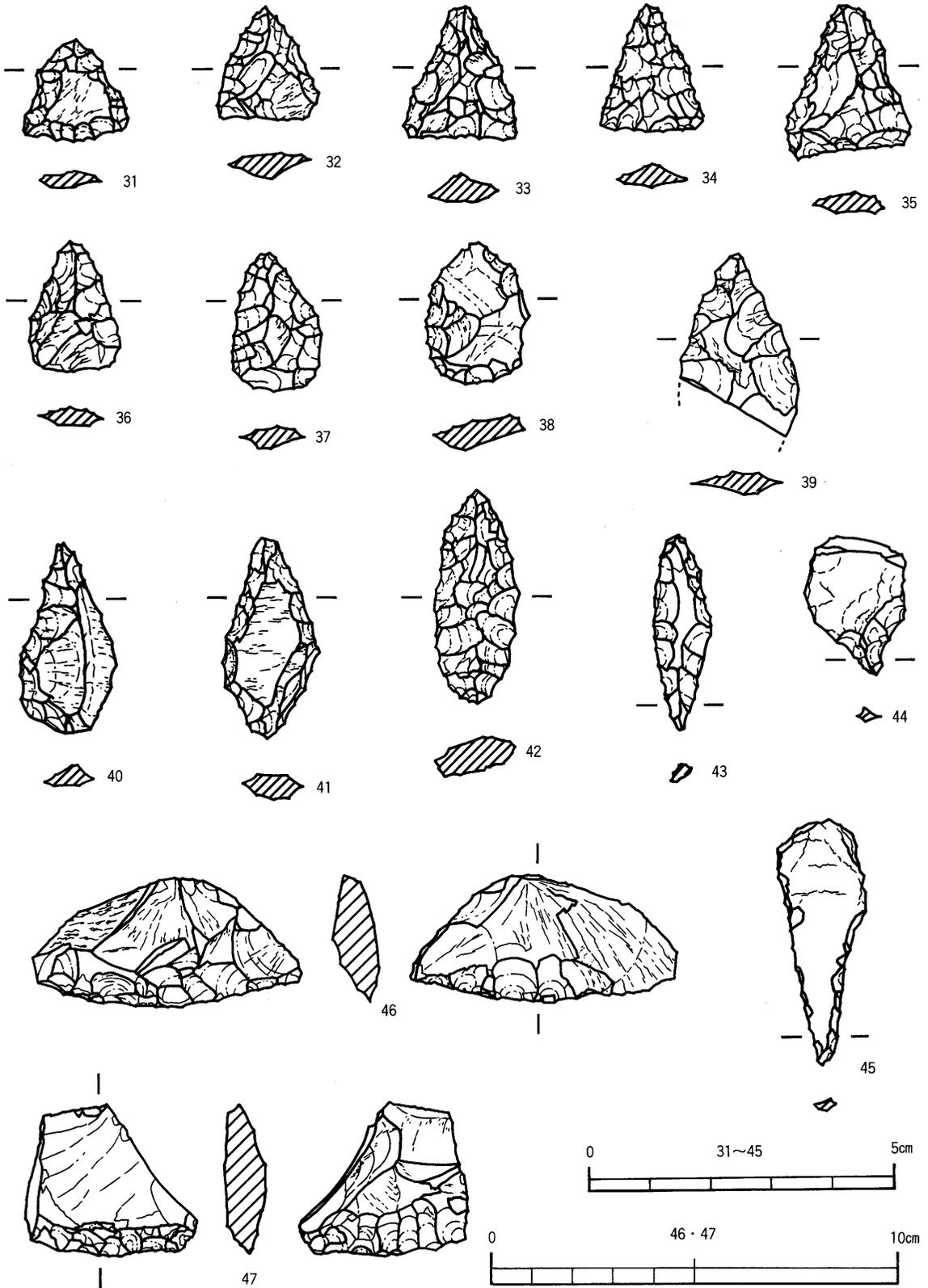
以上、今回の調査結果を基に、いくつかの問題点を指摘してきた。次年度に予定されている調査に期待すると共に、得られた成果について、さらに検討を重ねていきたい。

〔註〕

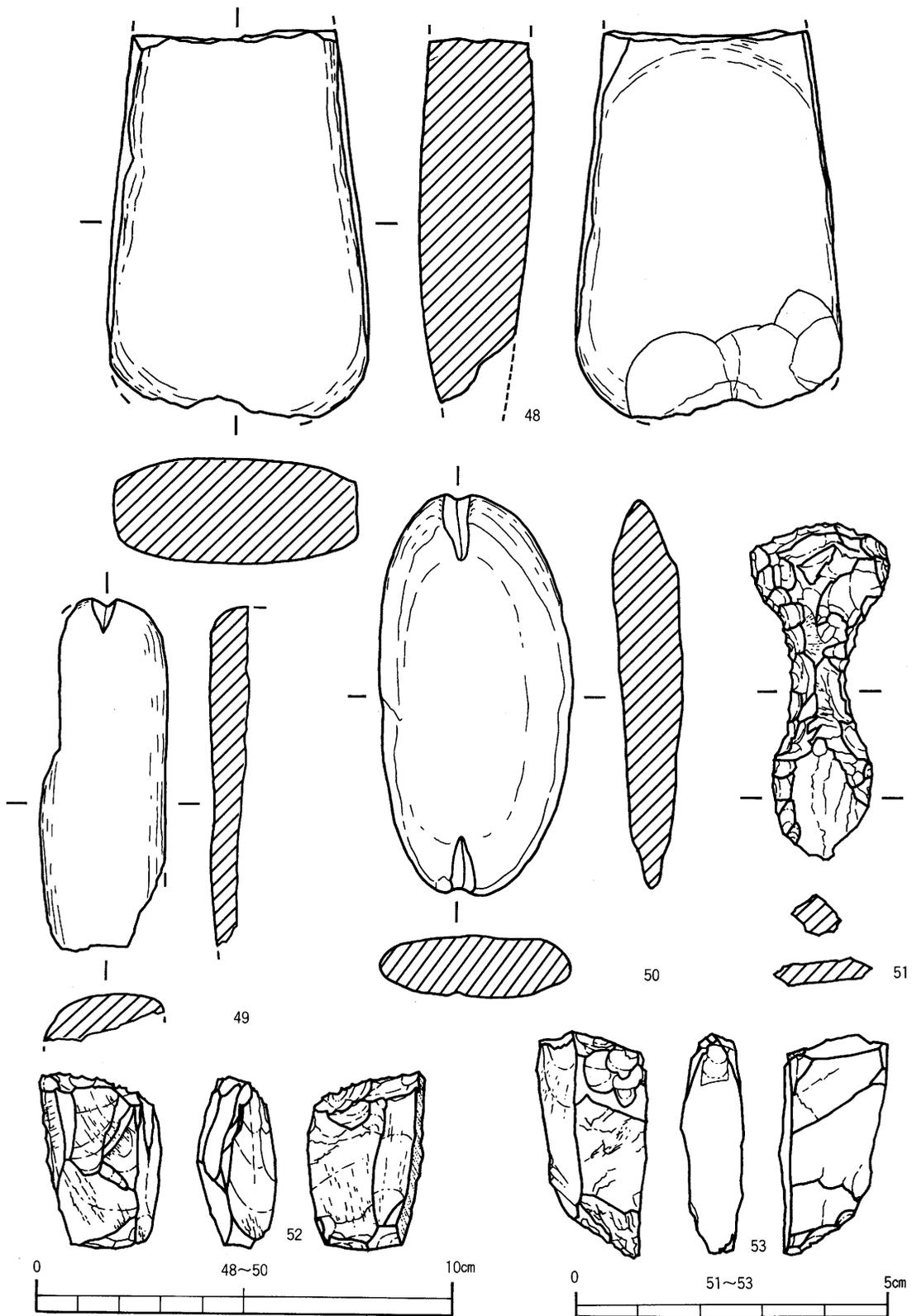
- 註1. 表1は「和歌山県遺跡地名表」県教育委員会 1983 に拠る。  
その他、以下の文献を参照した。  
「金屋町誌」上巻 金屋町 1972  
「和歌山県の地名」 平凡社 1983  
「清水町の民俗行事」 清水町教育委員会 1984  
「和歌山県史」考古資料 和歌山県 1983  
「和歌山の研究」1 地質・考古篇 清水堂 1979  
「日光社発掘調査報告」 吉備高等学校清水分校 1966  
「紀伊有田地ノ島遺跡の調査」 有田市教育委員会 1960
- 註2. 第2次調査で検出されている遺構についても、今回新たに統一した遺構番号を付した。
- 註3. 遺構全体図には、本文中で言及した遺構についてのみ、その遺構番号を記載した。E～G区についても同様。
- 註4. 石器の整理にあたっては、藤井保夫、武内雅人両氏より御教示を得た。
- 註5. 分類については以下の文献を参考にした。  
「紫雲出」 詫間町文化財保護委員会 1964  
「池上遺跡」第3分冊の1・2、石器編 (財)大阪文化財センター 1979
- 註6. 一部欠失するが、統計処理上影響がないと判断したものについては表示した。
- 註7. 「ふたがみ」 学生社 1974
- 註8. 縄文土器に関して、中尾憲市・前田敬彦両氏から種々、御教示を得た。  
また、主として以下の文献を参考にした。  
「和歌山県北山村下尾井遺跡」 北山村教育委員会・北山村下尾井遺跡調査会 1979  
「溝ノ口遺跡」 I・II 海南市教育委員会・海南市文化財調査研究会 1984・1987  
「仏並遺跡発掘調査報告書」(財)大阪府埋蔵文化財協会 1986
- 註9. 「池上・四ツ池遺跡」16・17 第2阪和国道内遺跡調査会 1971
- 註10. 北野隆亮氏の御教示による。
- 註11. 「野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書」 和歌山県教育委員会 1985



第15图 石器实测图1



第16图 石器实测图 2

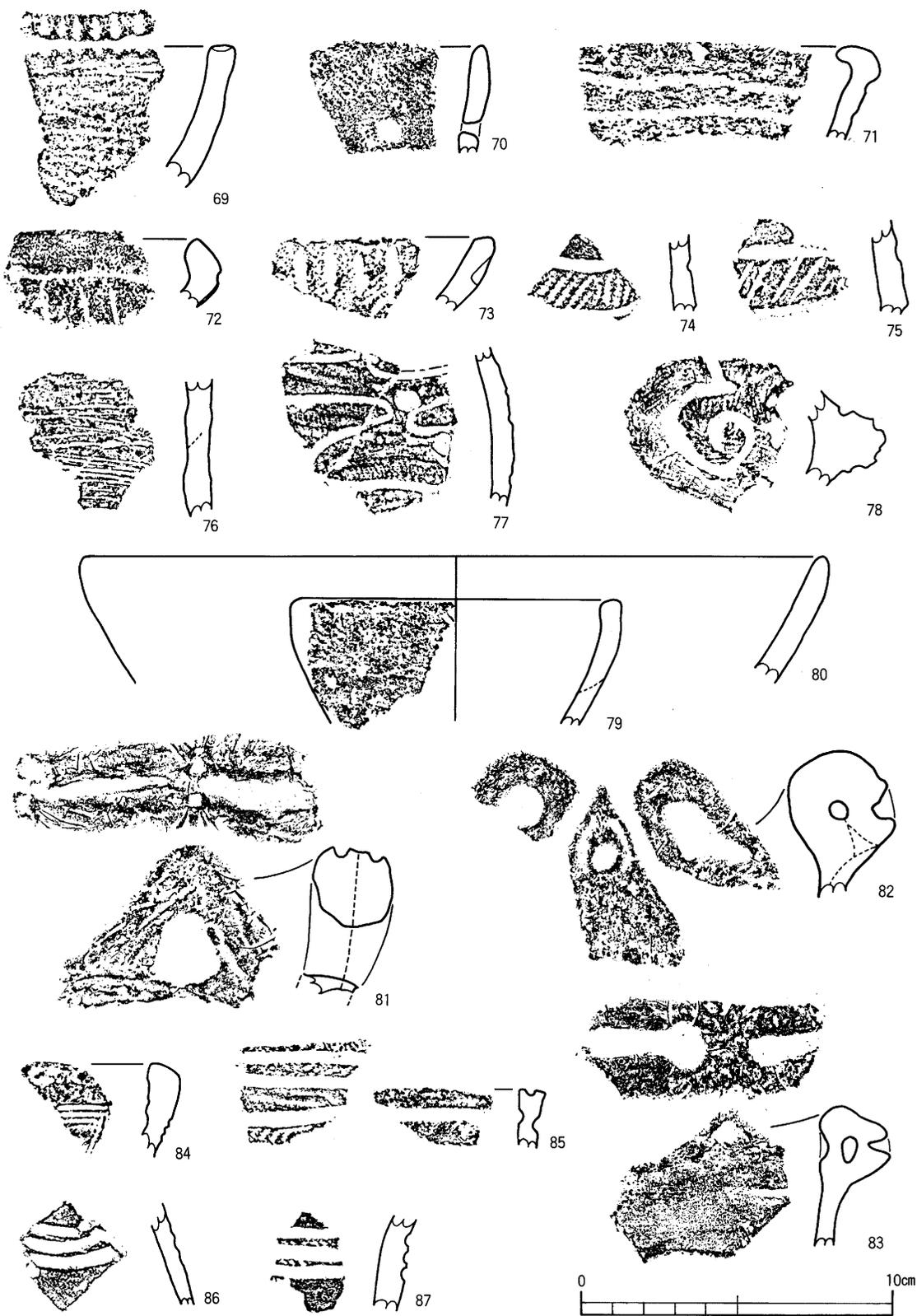


第17图 石器实测图 3



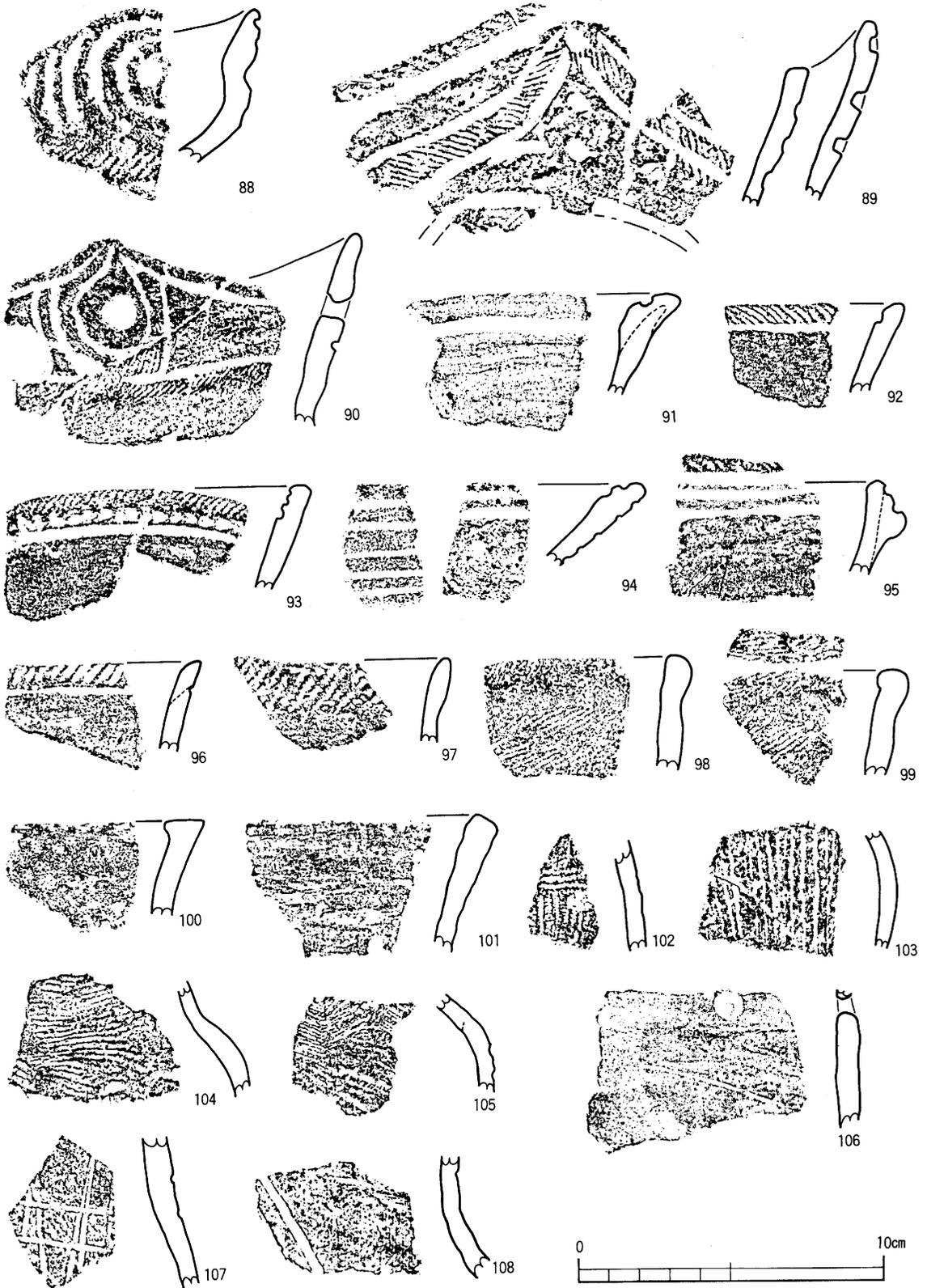
54-S K16, 55-P6, 56-S K22, 57-S K13, 64-S K06, 66-P15

第18図 縄文土器実測図1



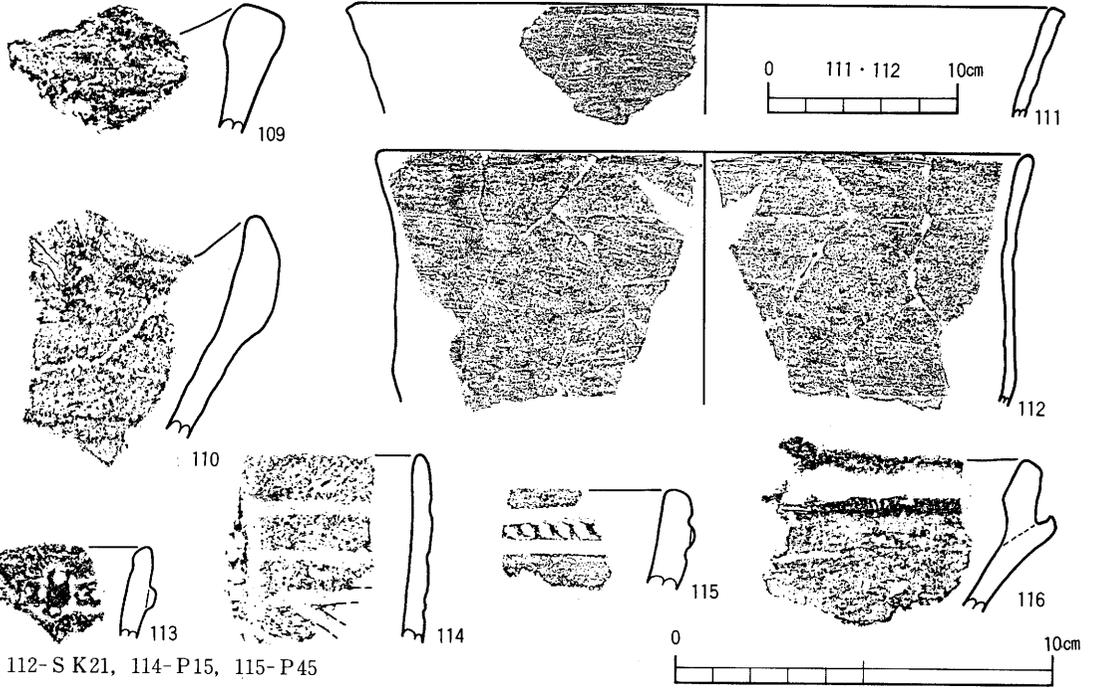
69-S K33, 73-P30, 74-P26, 77-S K15, 81·84-S K16, 85-P12

第19図 縄文土器実測図2

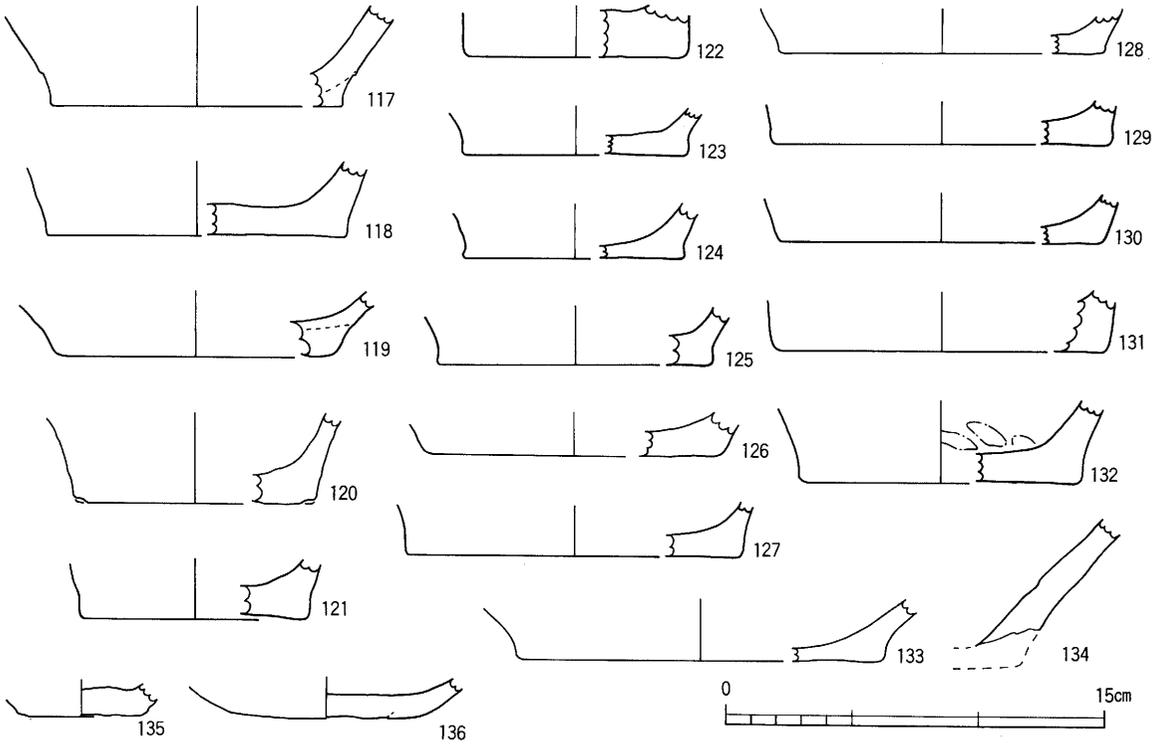


89-S K22, 92-S K35, 100-S K32, 103-S K16

第20図 縄文土器実測図3

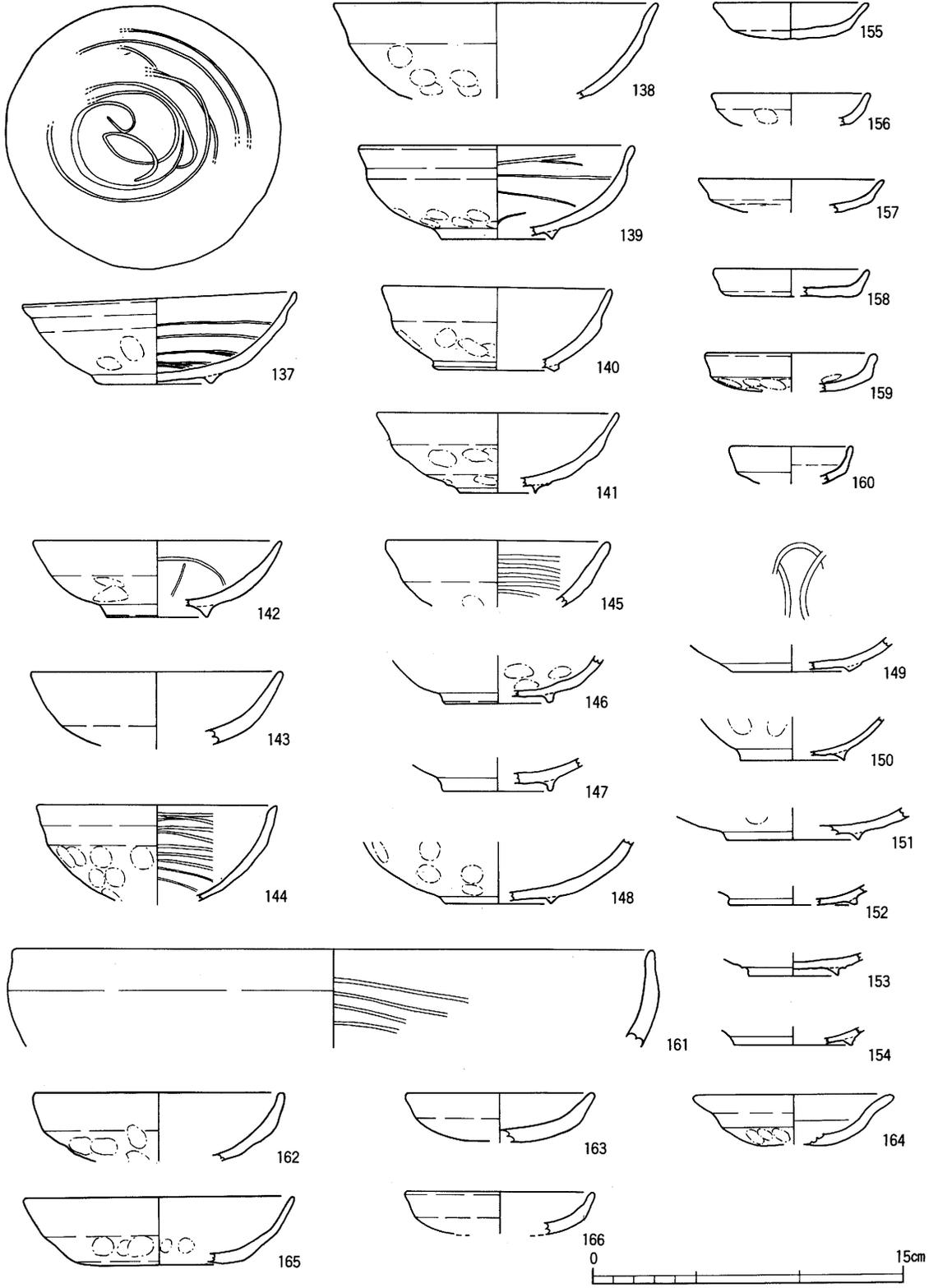


第21図 縄文土器実測図4



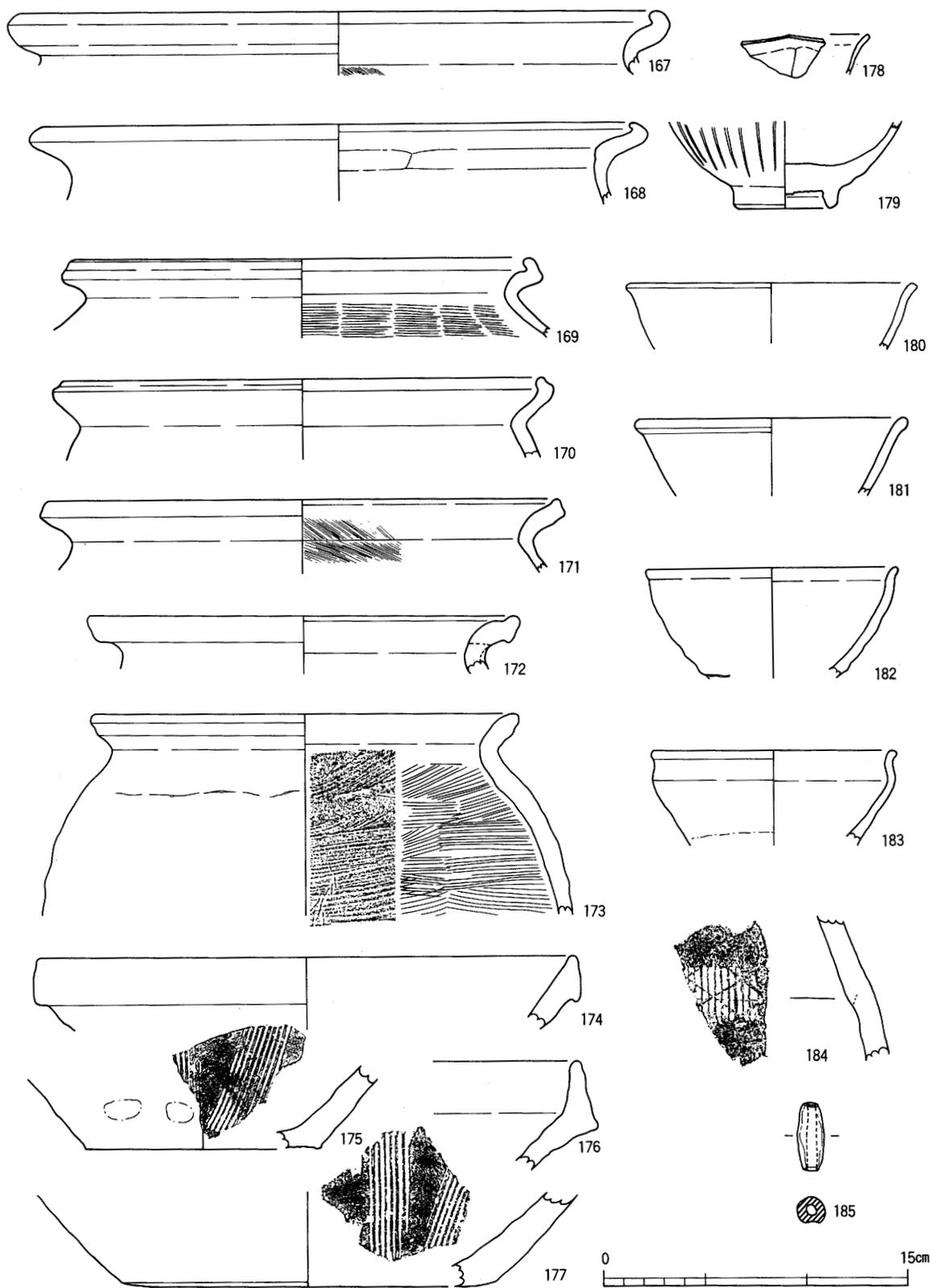
118-S K19, 119-S K12, 120-S K14, 121-S K21, 128-S K16, 133 · 134-S K19

第22図 縄文土器実測図5



137-S X01, 142-P115, 143-S K52, 149-S K53, 152·164-P111, 163·166-S K64, 165-S K58

第23图 中世遺物実測図1



180 · 184 - S K58

第24图 中世遺物実測図 2

# 圖 版



1 遺跡遠景 (北から)



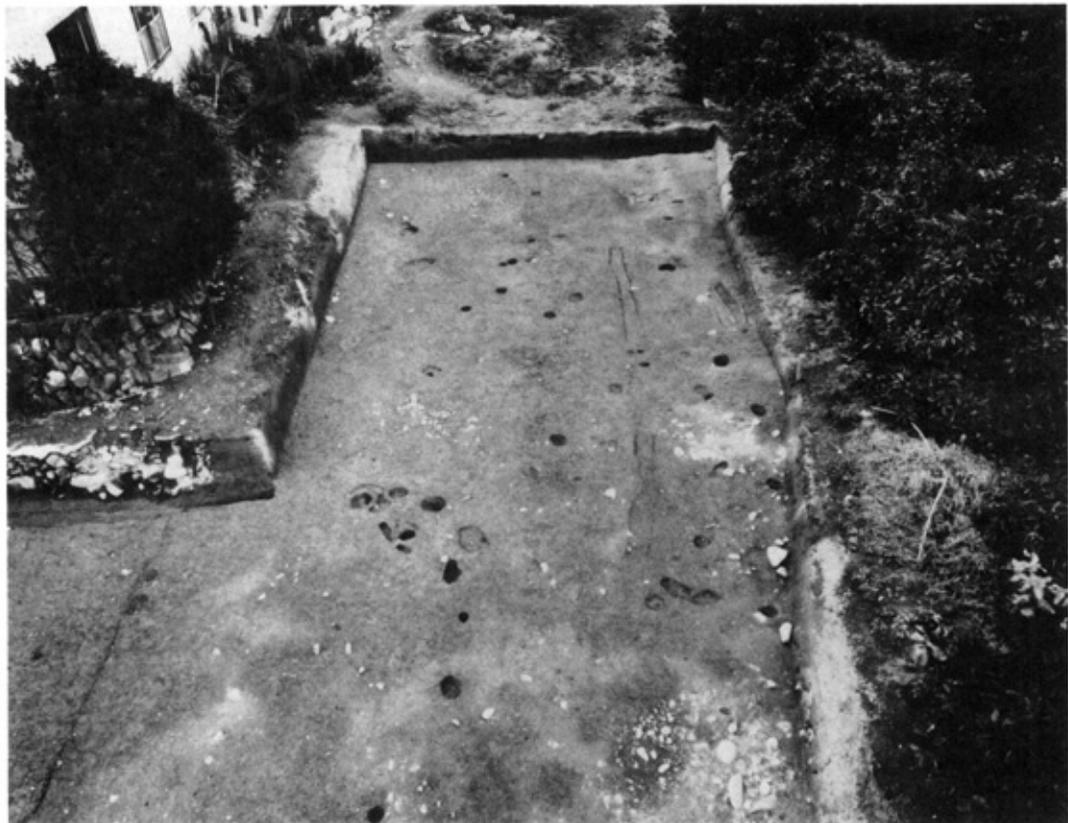
2 遺跡全景 (南から)



1 A～C区全景（北から）



2 A・B区全景（南から）



1 C区全景 (北から)



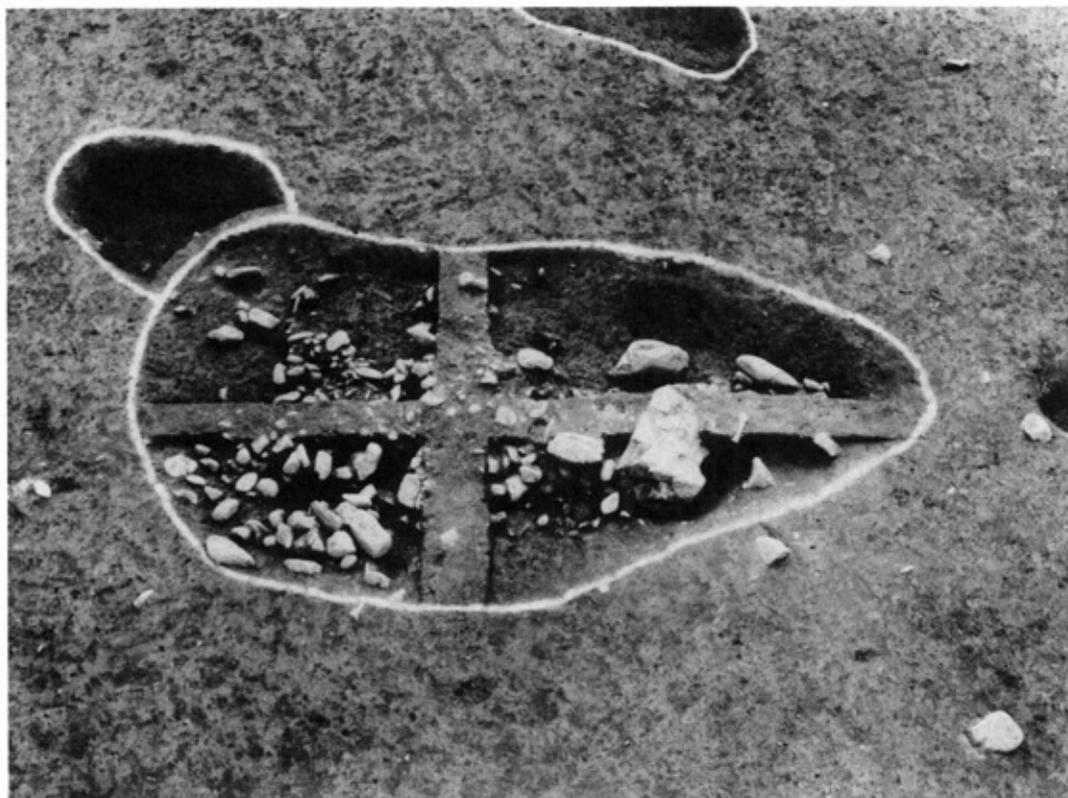
2 S K12・16・30 (南から)



1 S D01 (北から)



2 同 土層



1 集石1 (北から)



2 D区全景 (東から)



1 E~G区全景 (北から)



2 同 (南から)



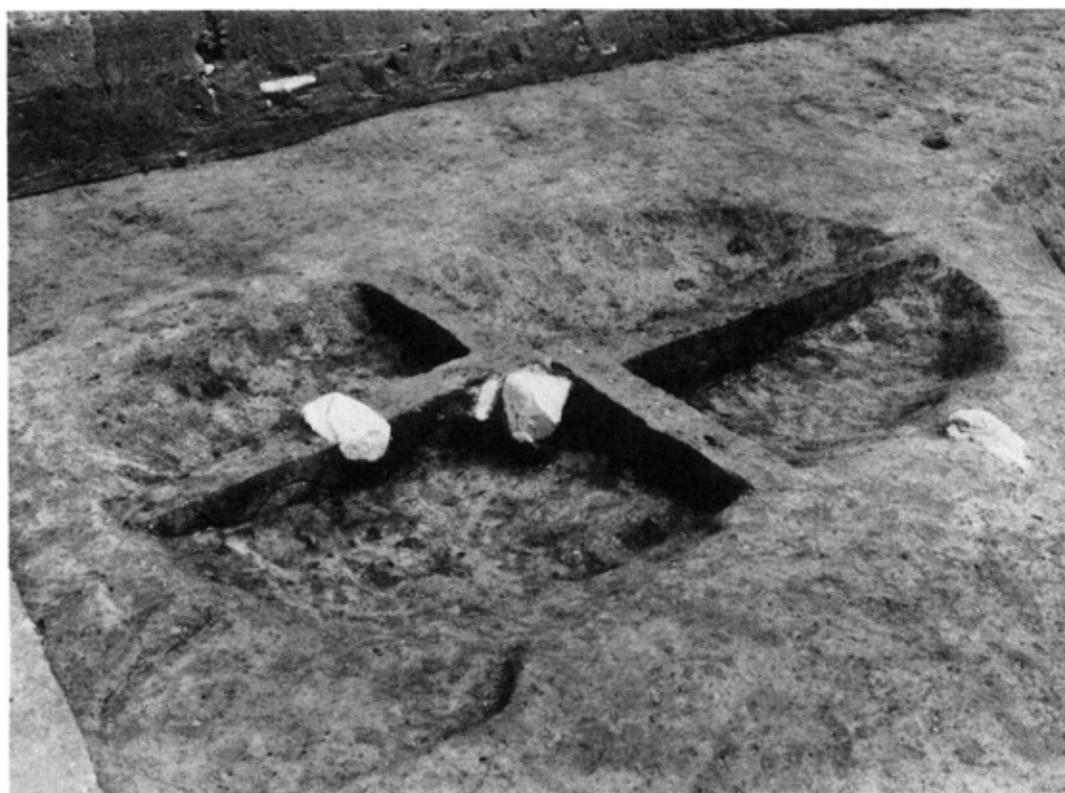
1 E～F区北半検出遺構（南から）



2 同 南半検出遺構（北から）



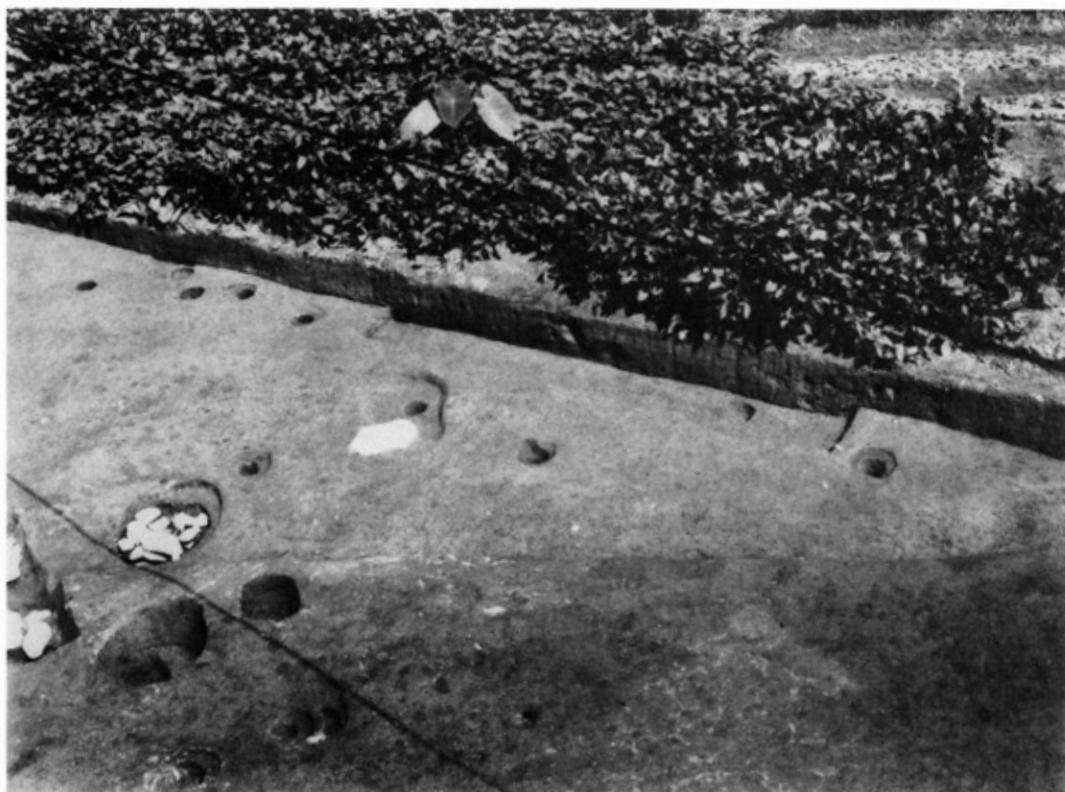
1 SX01 (西から、第2次調査)



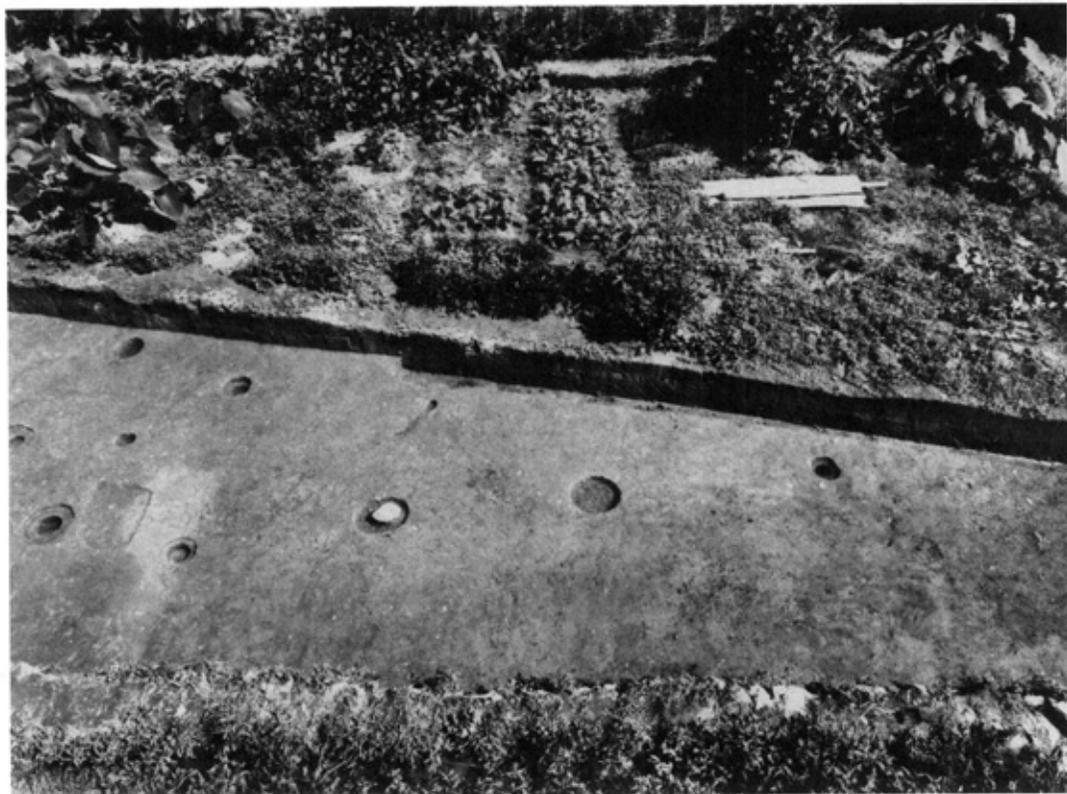
2 SK65 (西から)



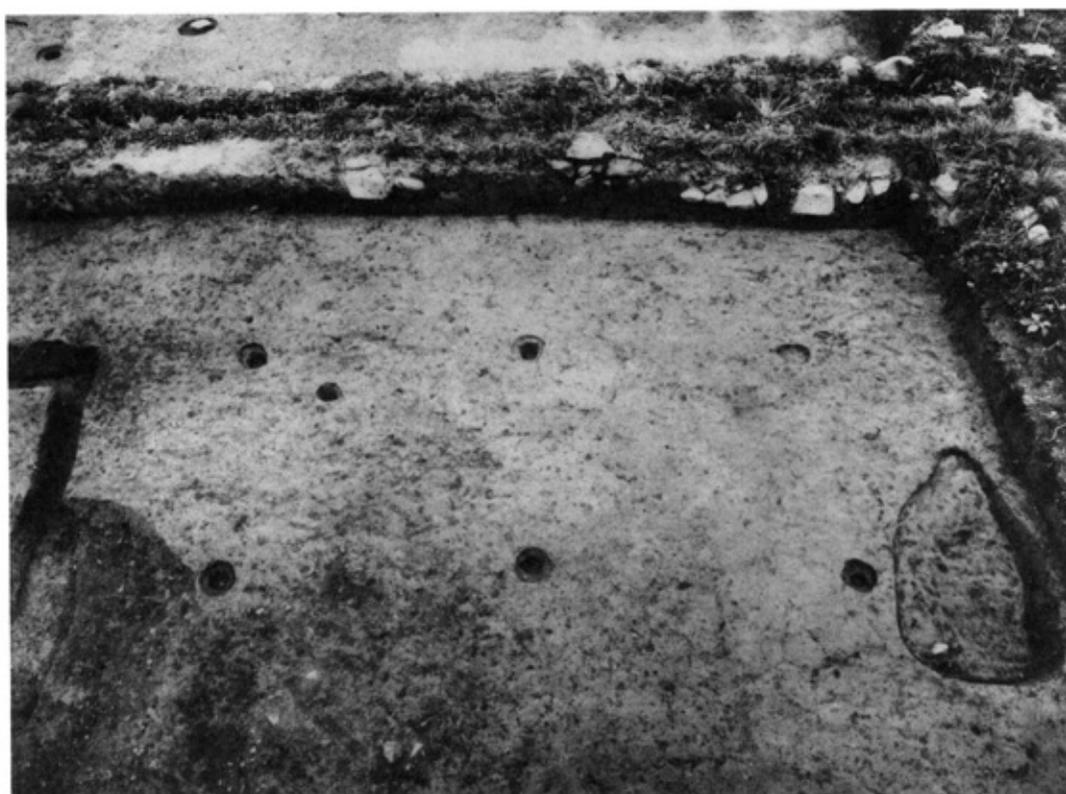
1 SK58 (北から)



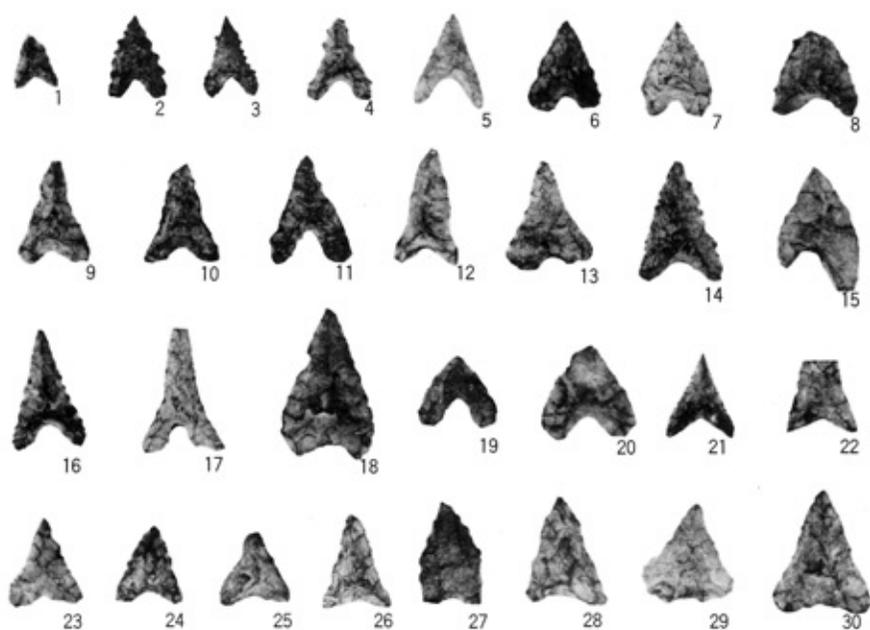
2 SB01 (南西から)



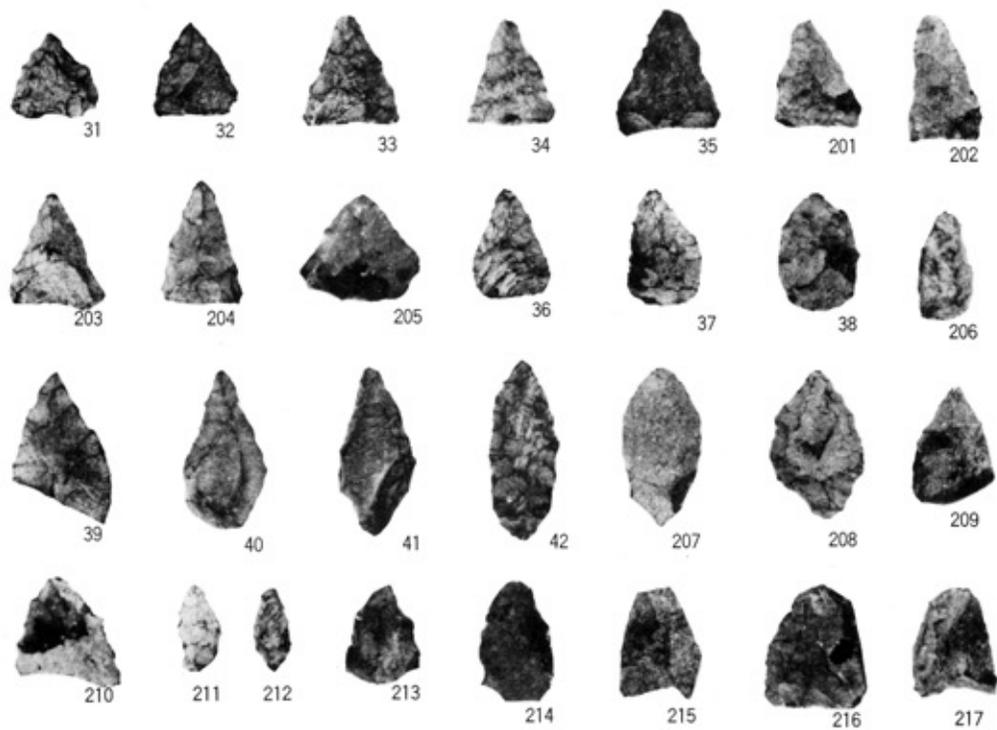
1 S B04 (南西から)



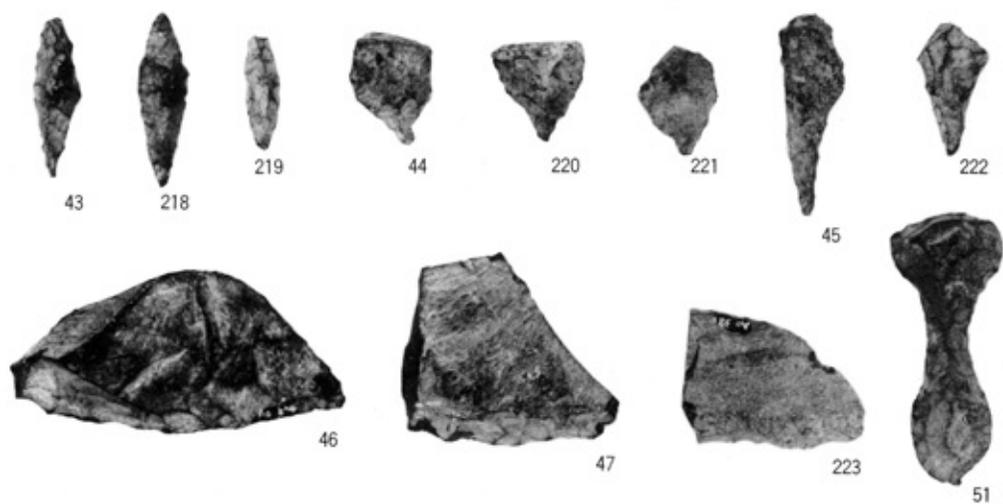
2 S B05 (南西から)



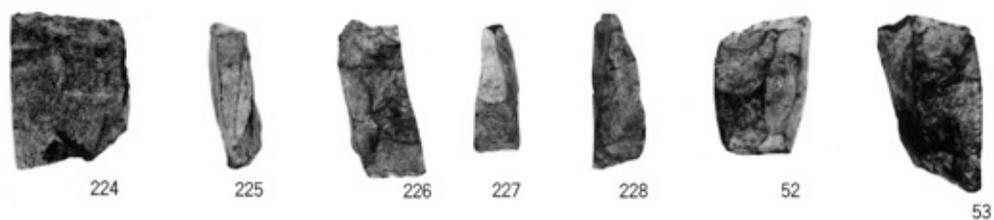
## 1 石鏃Ⅰ類



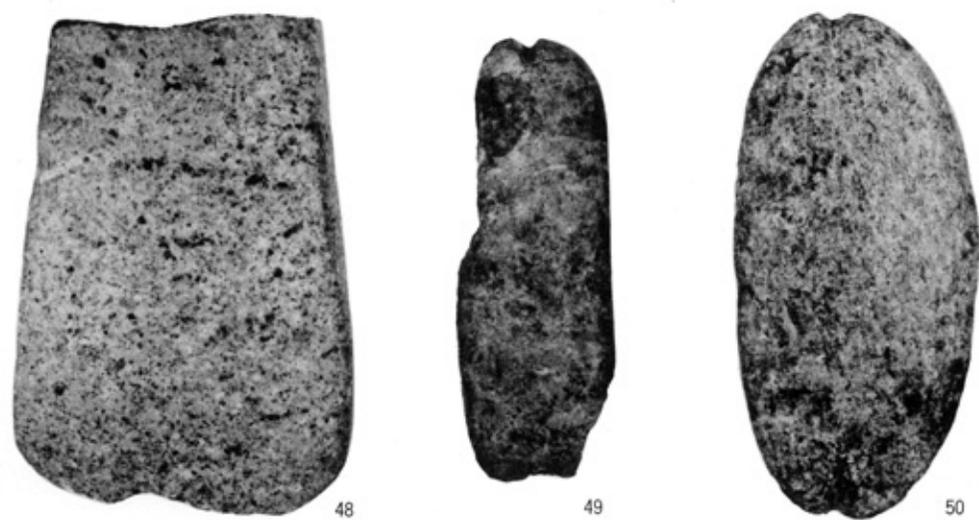
## 2 石鏃Ⅱ～Ⅳ類・未製品



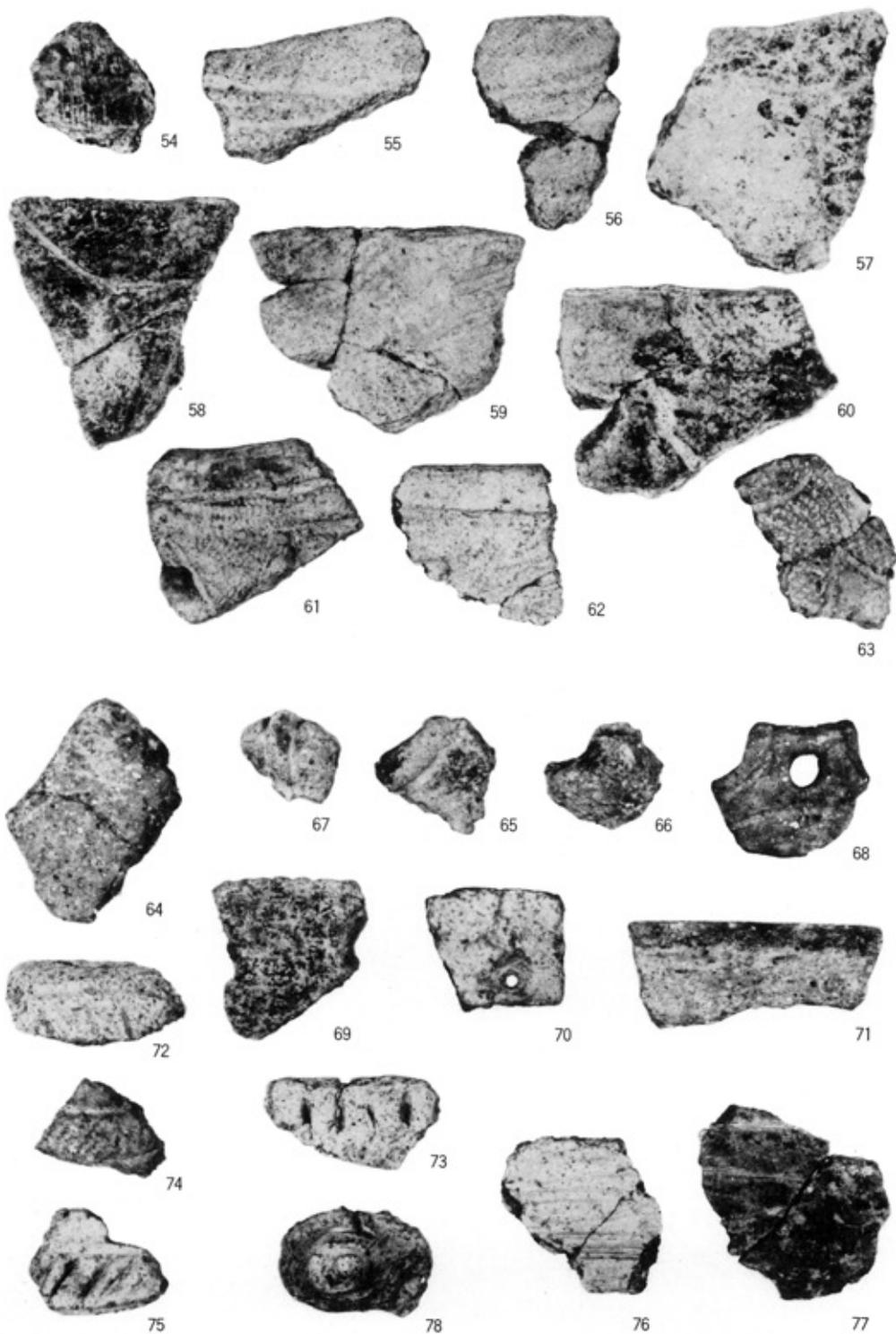
1 石錐、スクレイパー他

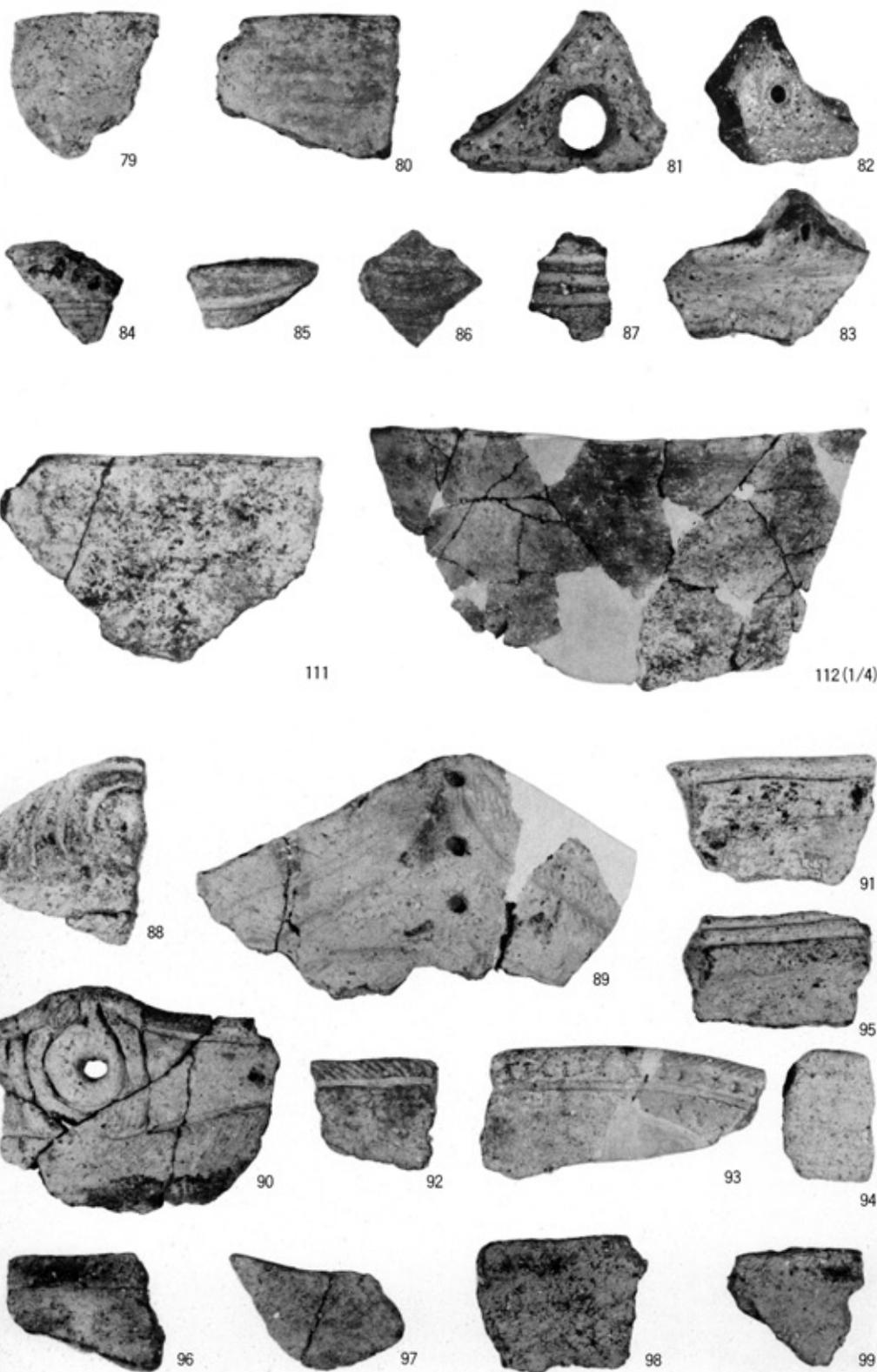


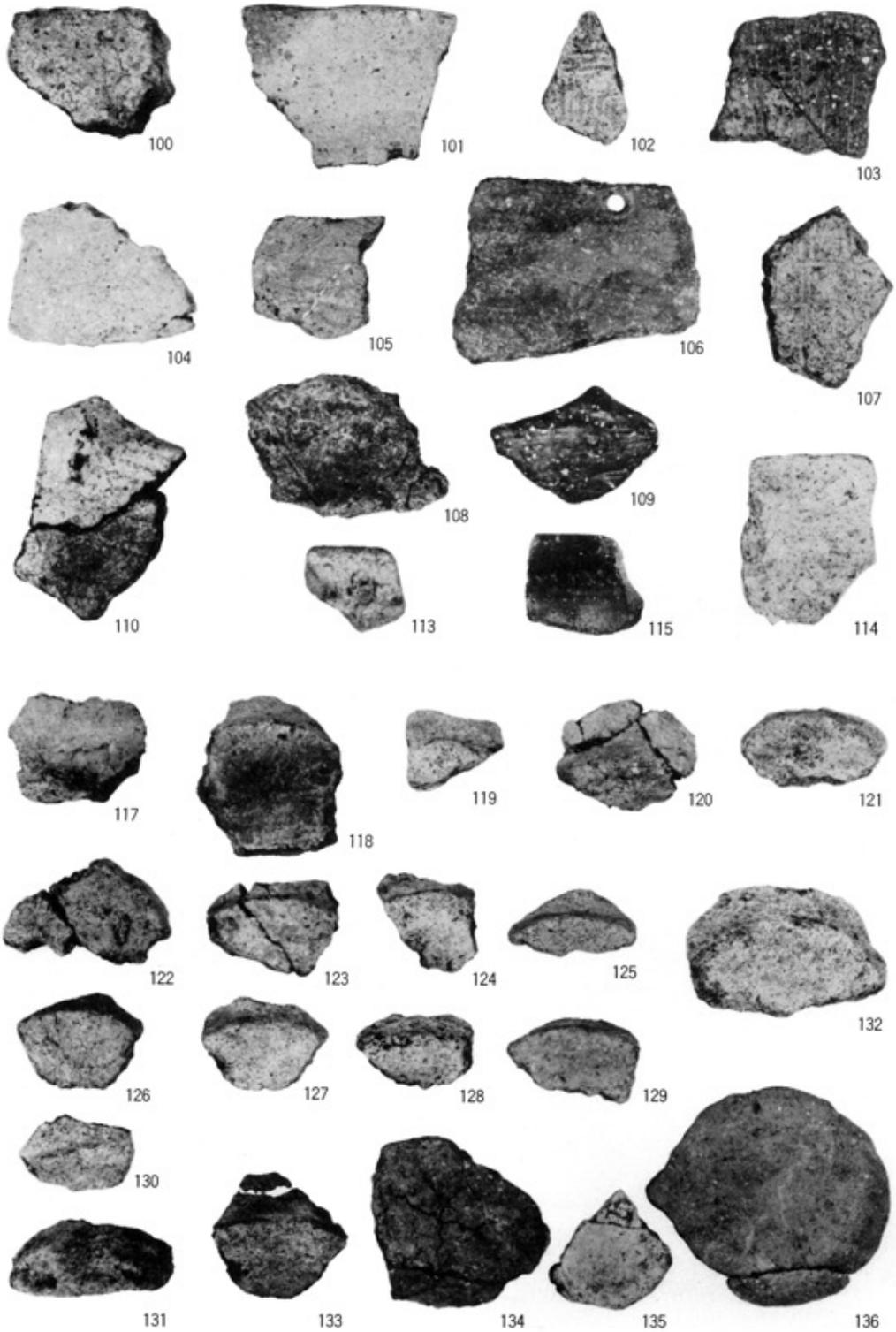
2 楔形石器

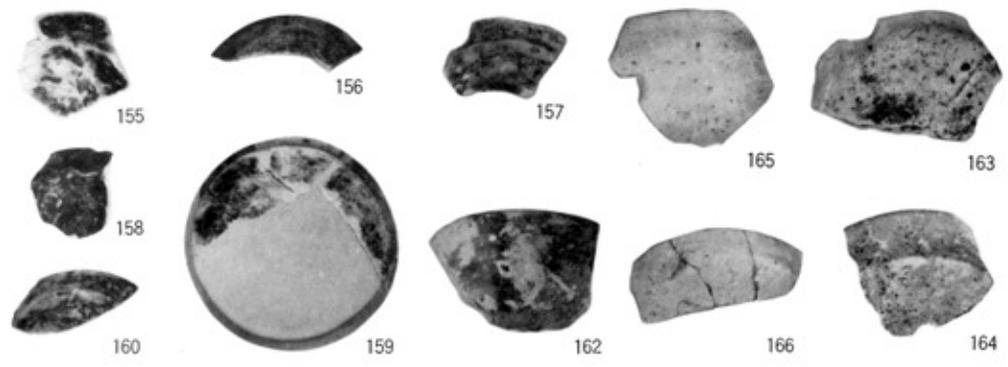
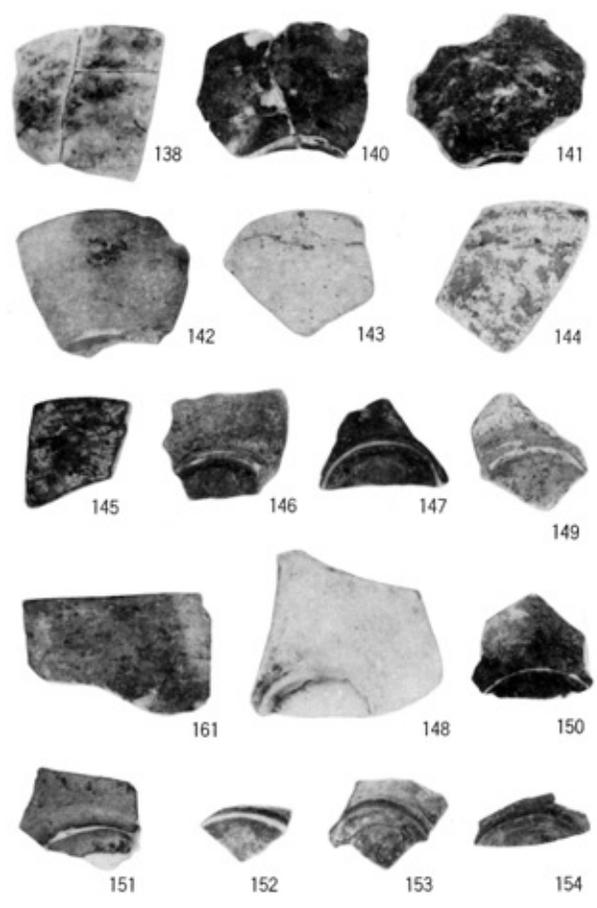


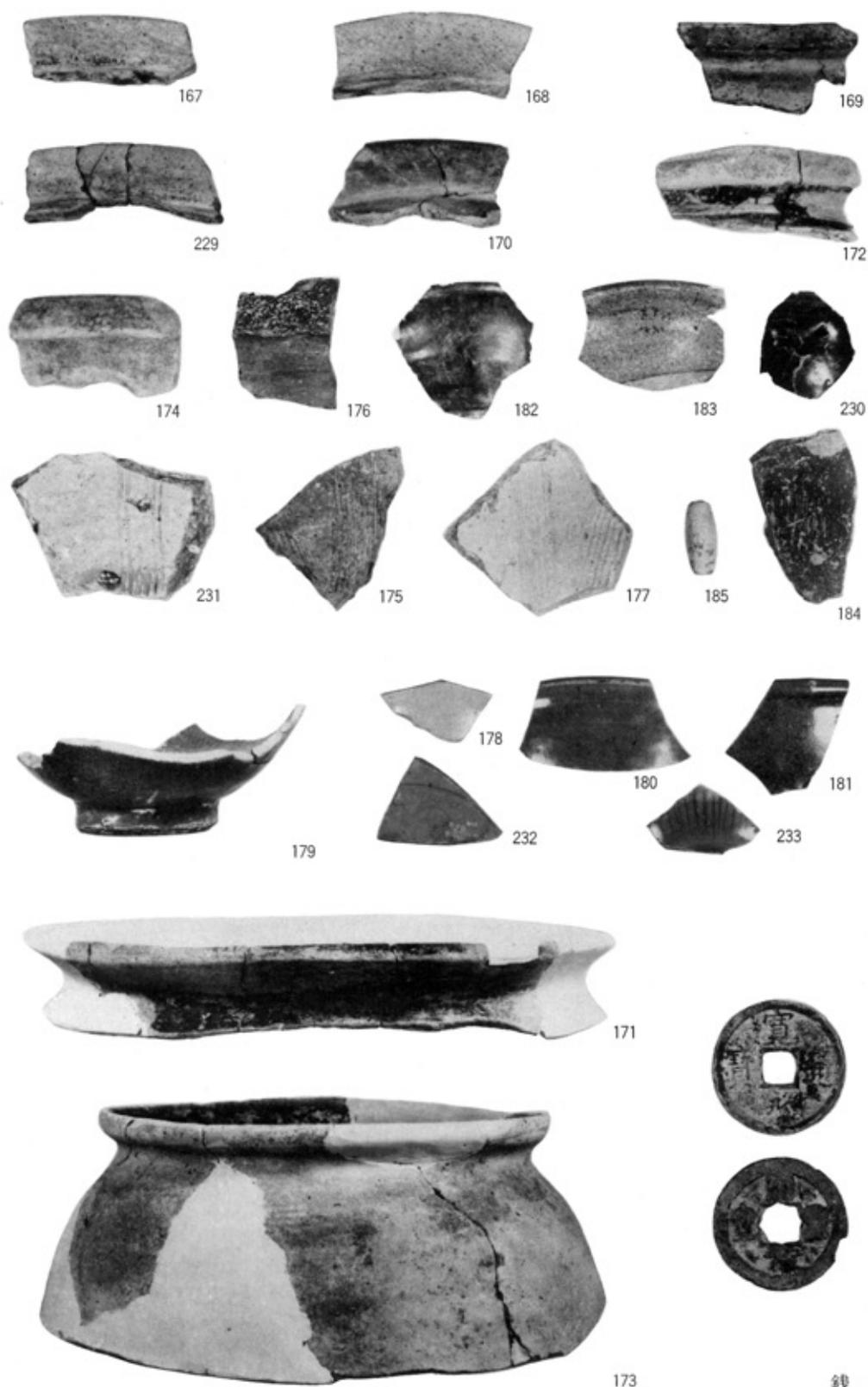
3 石斧、石錘











中世の遺物 2 (171・173・178~181・232・233, 銭貨は任意)

銭貨

粟<sup>あ</sup>生<sup>お</sup>遺跡

発行日 1988年3月26日

編集・発行 財団法人和歌山県文化財センター

印刷 (有) 真 陽 社

